都名所圖會

前朱雀
再刻

五

和書門 類 號 函 架 冊

内閣文庫
和書 類 號 八六五九 函 架 冊

内閣文庫		
番號	和	8659
冊數	11(5)	
函號	172	176

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會巻之五目録

前朱雀
八幡疫神祭
常盤地藏
阿弥陀堂
石清水
細橋
志水
大荒木森
城南社
美福門院墓
冠石 碁盤梅
墨染桜
神宮寺
狐川渡
下高良社
上高良社
影向桜
正法寺
淀田森
秋の山
西行寺
鐘木町
城山 桃の名所
放生川
宿院
鳩峯
琴塔
瀧本坊旧跡
女郎花塚
淀川
竹田
西行桜
墨染
梅谷 梅の名所
餌飼地藏
疫神堂
八幡宮
景清塚
御祭礼図 放生會来由
淀姫社
水車 夜舟図
北向不動院
安樂壽院
墨染寺
深草少将旧跡

欣浄寺
瑞光寺
石峯寺 茶碗子
栗栖小野
少将通路
一言寺
長明方丈石
京橋舩場
撞川橋
三室戸寺
茶摘圖
宇治橋
朝日山

深艸 翁庵
元政墓
即成就院
小野
下醍醐
笠取山
石田
豊後橋
小幡
宇治山
宇治川
通圓茶屋
恵心院

藤森社
昭宣公墳
那須与一墳
小町水
上醍醐
日野薬師堂
佛國寺
指月
弥陀次郎旧跡
喜撰嶽
山吹瀬
橋寺
興聖寺

走馬圖
宝塔寺
桓武帝陵
榧の木
醍醐水
重衡塚
御香宮 御香水
六地蔵
黄檗山万福寺
宇治十帖古跡
橘小嶋崎
離宮神
琴坂

亀石
槇の嶋
槇尾山
鎧掛松
鮎汲圖
鷲峯山金胎寺
兜社
玉川
蟹満寺
一休和尚旧跡
狛里
鶯森
加茂社

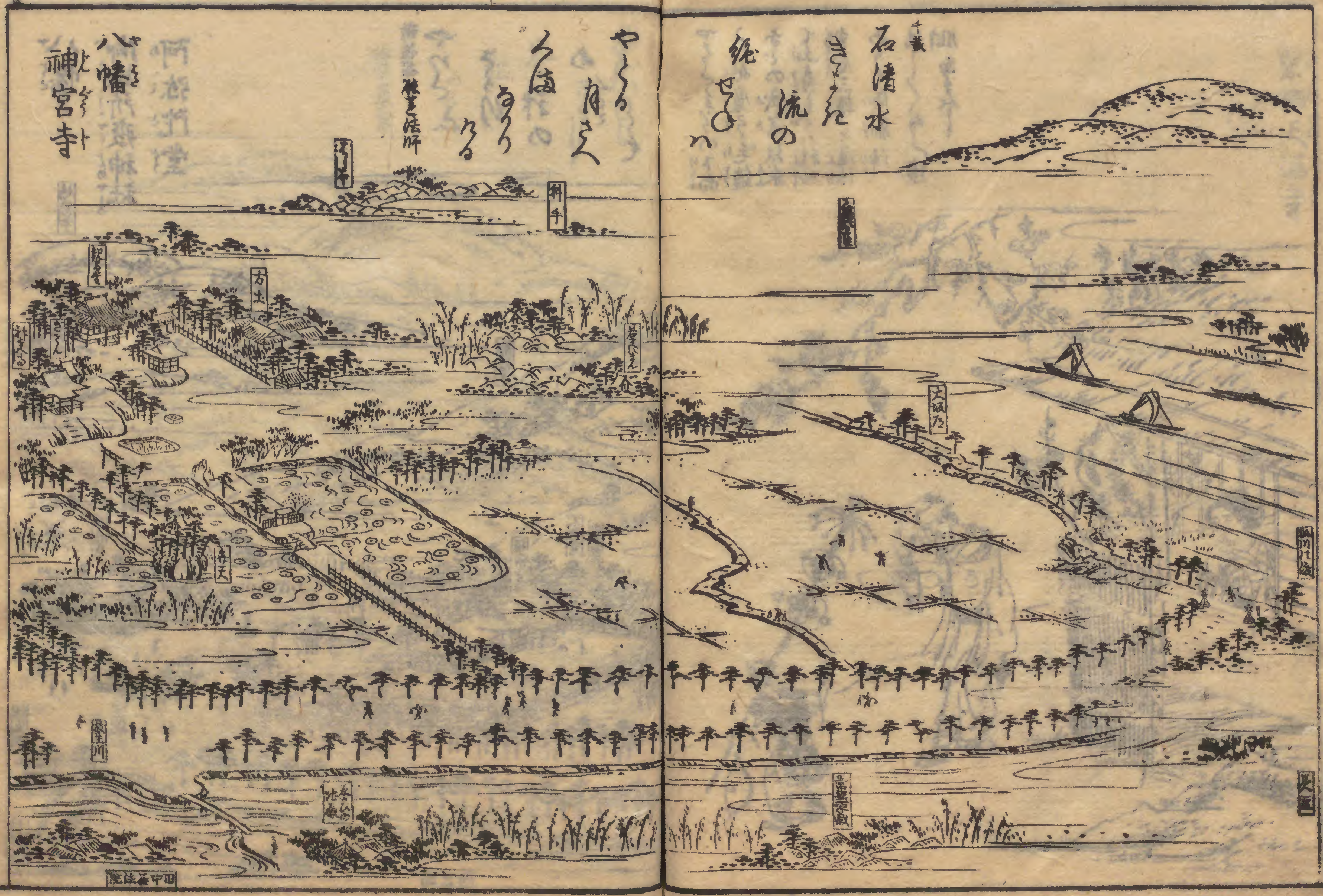
山吹瀬
橋姫社
平等院
扇芝
宇治田原
百丈山大智寺
玉水
井手里
涌社
天神杜
瓶原
海住山寺
清見河原

中宿芝
浮舟嶋
鳳凰堂
駒繋松
黄栗焼栗林
久世鷺坂
諸兄公旧跡
光明山
北吉野神童寺
綴喜郡
相社
恭仁都
笠置寺

蛍狩
特銅瀬
釣殿
縣社
信西入道墓
椎尾山
玉井寺
高倉宮霊廟
薪酬恩菴
木津川
國分寺
流岡
後醍醐帝皇居

やくまゐりの下向
より破魔弓毛鑓
などの武器を求
て土産とするハ神功
皇后三韓を退治
ありて御凱陣
ありし遺
風なるべし

栗栖天満宮


八幡神宮寺
千載
石清水きよき流の絶せねは
やとる月さへくまなかりける
勝清法印
方丈
弁天

八幡
御旅所疫神社
阿弥陀堂
新後拾
やはた山さかゆく神のめぐみとぞ
千代をもさしし峯の松かえ
摂政太政大臣
鳩の峯
七曲
高良社
不動堂
庚申堂
極楽寺
放生川

石清水
八幡宮
武内臣
御本社
宝蔵
住吉
仁徳
若宮
大塔
琴塔
元三大師
稲荷社
町

石清水正八幡宮は王城の南にして行程四里綴喜郡男山鳩嶺に御鎮座あり

新続古今　後鳥羽院

やはらくる光さし初しむかしより松の萬代と松風ぞふく

続後撰　後京極摂政

くもりなくてらせよかしは男山おなしくみねより出る月影

本社は三坐なり中は誉田天皇　日本紀に足仲彦天皇の子又応神天皇と申奉る是仲哀天皇第四の皇子にして御母は神功皇后也御在位四十一年聖寿一百十一歳　玉依姫　東の間に鎮坐し給ふ鸕鶿草葺不合尊の妃にして神武天皇の御母なり　神功皇后　西の間に鎮坐し給ふ開化天皇の曾孫気長宿禰の女なり幼より聡明睿智貌容壮麗ましまし三韓を平て筑紫にかへりて応神帝を生給ふ在位六十九年聖寿一百歳

當山の御鎮坐は貞観二年六月十五日和州大安寺の沙門行教和尚神殿を造営し給ふ行教は筑紫宇佐八幡宮に一夏九旬の間参籠して眞言を読誦して法楽せしに八幡宮御託宣あり是王城の近に遷坐して国家を守護し国家を安泰ならしめんとのたまふ其夜行教の二夜に阿弥陀の三尊現じ給ひ都に上つて此由を奏聞しゆゑに朝廷大に悦せ給ひ遂に此山に神殿を営て永く崇敬し給へり

八幡の神號は筑紫宇佐宮御託宣の時松の下に八流の幡降る赤幡四流白幡四流則此瑞に社を建て正八幡大菩薩と崇奉る又一説には和気清麿に託して書曰八幡とくるを名づけたまへり當社は行教の勧請より両部にして社僧の座主とほうしゆなりしが今は唯一の神道にして往古の社務ありけるとぞ

一鳥居　山下宮院よりあり八幡宮の額は佐理卿の筆なり旧額を模しけれとぞ松花堂まゝに書給ふ

二鳥井　七曲の二鳥居　大師堂の前にあり石柱に銘を彫正保二年正月従四位下行信濃守大江姓永井氏尚政造立し奉るとあり

若宮　仁徳天皇を祭る　若姫宮　宇禮姫呂禮姫を祭る　水若宮　宇治の皇子を祭る仁徳帝の御弟なり

上高良　武内大臣を祭る大綱の尾下にあり　下高良　藤大臣連保を祭る社號を高良玉垂命といふ干満の両顆をのべて寿三百十余歳奉行しの人故に

石清水　本殿の巽山の半腹にあり傍に石清水摂社あり

続古今　貫之

松をわひ人を頼むとも石清水行末とほくつかへまつらん

新拾遺　兼家

神わさのやうけも宗に清水ちよをわれすゑぞ久しき

楠樹　神殿の西の回廊の外にあり判官正成祈願のため植栽し　楠　東回廊の外にあり今此楠の古株あり前にあり

安宗別当社　楠の傍にあり行教和尚の弟子安宗の霊を祭る

狩尾社　本殿の西六町ばかりにあり大日孁貴命を祭る

大塔　大日多宝の二尊を安置す　琴塔　毘沙門天を安置す軒の四方に琴をかけて風発の代によし　太子堂　山堂におよそ十歳の太子の像

薬師堂　護国寺といふ當社御鎮座以前の薬師

像阿弥陀佛を安置す　阿弥陀堂

八幡宮社僧の元三大師堂　大師の御作は御の君の姿を比叡山にあり

愛染堂　愛染明王を安置す

疫盡堂 一乗院の南廊下の内にあり此所八幡宮御旅所之疫神祓ハ正月十九日一日の勤なり延喜式に山城と摂津の堺にして疫神をまつりしことあり世人正月十八日より十九日まで当山へ群参して其年の疫難を払ふなり土器にみづから姓氏将家の札月釘竹破魔弓毛鑓等を求めて家にかざる邪鬼を退くるなり

本地堂 疫神堂の西に並ぶ極楽寺と称す本尊ハ阿弥陀仏脇士ハ観音勢至を安ず本殿の御正躰なり堂前の鉄燈籠ハ豊臣秀頼公の所寄附るなり

細橋 八幡住吉の二神影向ありし所なり石を布て橋の形とす 何連なるを橋に伊勢宮遷所なり

宮本坊 行教院と号す 所々人所なり

瀧本坊 石清水の傍にあり松花堂惺々翁昭乗の住房なり文殊慶安のはの人にして書画をよくし今に其名高し

開山堂 行教和尚の像脇壇に弘法大師の像あり 泉坊あり 本覚大師の像あり真

僧正禅助建立 景清塚 平家の侍士悪七兵衛景清主君の讐を報ぜんとて小松殿将軍頼朝卿当山参詣の時をねらひしとぞ しのゐ人なり

稲荷社 名を鍛冶宗近此所に宗近鍛しけり

大乗院 宿院科手の向ふにあり当山の神宮寺なり本尊ハ千手観音安置す 興聖菩薩 神殿をも作り功皇后をまつり愛染明王を方丈にありて安置す 開基ハ

足立寺 本殿の西にあり昔称徳天皇の御宇弓削道鏡に帝位をゆづりたまはんとし給ひしに和気清丸を勅使として宇佐八幡宮に参らしめ給ふ神託ありて帰洛し清丸上洛して此旨を奏しけれバ道鏡怒りて清丸の二ツの足を切て河内に流さんとのせて流すに此所にて宇佐の使者にあひたりし清丸を負ふて神殿に詣らしむるに社壇より五色の小蛇出て清丸が腫を舐るに二ツの足もとのごとくに生出けり清丸帰洛の後男山に伽藍を建て弥勒仏を安置し足立寺と号す

三ツ善法寺 当山の社務にして二ケ寺あり善法寺 新善法寺 九清泉 石清水 田中若しき等と何れも武内大臣の後胤にして紀氏なり 祠井 赤井等と其所図にあり

放生会ハ例年八月十五日なり人皇四十四代元正天皇の御宇養老四年九月に征夷の事ありて大隅日向の両国大に逆乱を放ちて兇重なりしかば宇佐八幡宮に御祈誓ありて其宮の祢宜辛嶋勝波豆米ハ神軍を引卒してかの国を征しまつて敵を亡しけり其後八幡の御託宣に此度合戦に多くの殺生をなせしかば放生会を修すべしとて神勅ありしかれバ諸国に放生会を此時より始まれり 扶桑記に云ふ後三条院延久二年八月十五日より上卿六府の駅秦勅をうけ行幸に準じて神輿の宮遷しまつらせ給ふとなり

放生川 八月十五日放生供養ありて放生を亭よりて魚鳥を放しける 高橋 又橋を 安居橋 といふ

新古今 男山秋のみしるしあるひとの世にたてるかはの流れ 家隆

臨時祭 二月中午日なり 天慶五年より始る

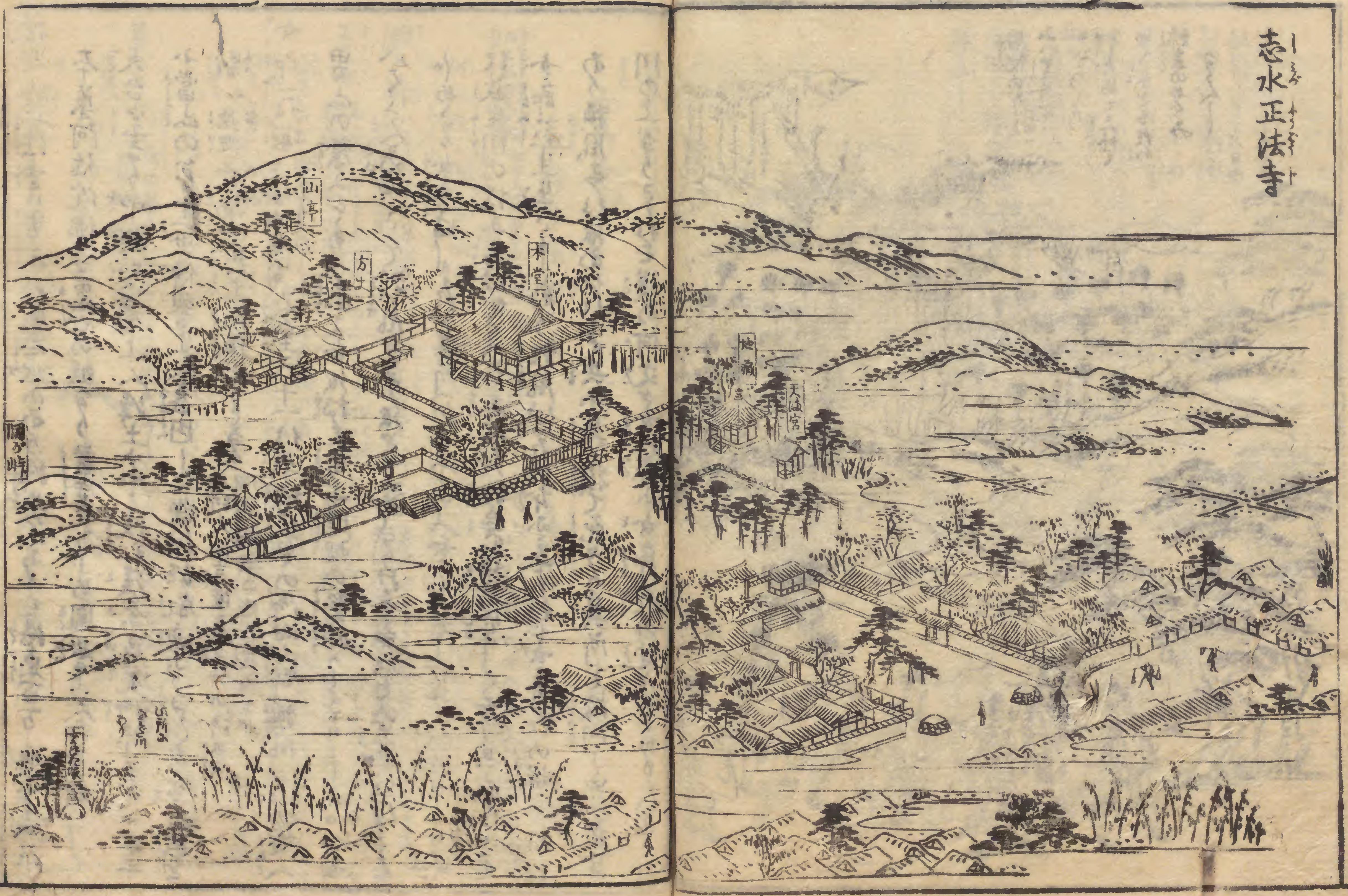
新勅 石清水すみしのまなり ちりもせじ衣にそれる竹の大宮人のかざしさくらは 定家

餌飼地蔵 小野小町の作なり全昌寺の内にあり放生川へ餌をあたへ常に幸あるとて 若宮八幡 科手にあり 常盤地蔵 上八町より八幡の社にあり

八幡社放生会ハ
毎年八月十五日の
未明より下院へ神
幸ありて日七ッ時
還幸ましますよし旨
又放生川の汀へ
社僧出てかちうく
の魚鳥を放ち
ことに此日ハ
遠近より諸人
群参し

宿院のかたハ
みへ芝居放下
附いろ/\乃
料理出て人垣を
なく市をなすハ
神恵のめぐみ
なるべし

志水正法寺



徳迎山正法寺は男山の南志水にあり浄土宗にして洛東百万遍に属す

本尊阿弥陀佛は恵心の作なり当寺はじめ圓楽上人の草創にして天台宗なり中興聖誉上人浄土宗と改む後奈良院御宇天文十一年に当山の第十一世傳誉上人参内して説法し叡感ましまして紫衣を給ふ

鴉人 徳迎山にあり 其上勅願寺とする 尾州大納言源義直卿の御母公相應院殿の御菩提所なり

唐門の額

女郎花塚 志水の南大町にあり 人皇五十一代平城天皇の御附小野頼風といへる優人男山の麓にあり京に女ありて頼風と連理の契浅からざりしに その女八くる人ありとて頼風が来ることもなくなりしかば その女じれたる女房なりしが其所へ行けるに頼風あだし人にうつりしと聞きて恨みかなしみて放生川の堤に山吹かさねの衣をぬぎ捨身を投て空しくなりぬ其衣くちて女郎花生出しかは頼風此花のもとに来りけれど女郎花の根より風情ありて頼風なびきあへれはそれ共に身を投て死たり其所を放生川といふ又放生川の上なりされど漢の何文が女は塚に女郎花の生たるも相似たり

古今の序にも男山の昔を思ひ出て女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける

古今

女郎花うしと見つゝぞ行すぐる男山にしたてりと思へば　布留今道

哀しり饑饉にもそしりし女郎花　班竹

如法經塚 男山の西にあり桓武帝王城鎮護として四方に經王を収らるゝ所を南岩蔵といふ河水橋より渡りゆく此名あり土人の口称なり

心を摘 志水の南天神森へ行右にあり又の名天月森ゆふ立に

美濃山 志水の巽にあり後鳥羽院の愛妃美濃局此所にもあり侍者小侍従と此人の跡なり

洞ケ峠 八幡の西半里にあり山城河内の境也南峠ともいふ

高野街道 志水の南より河内の田口村へ出る道也弘法大師此みちより高野へ参り給ふ

王塚 志水の西一里内里村の山にあり継體天皇の陵なりといふ

岩田 山里の氏神にあり一里余にあり御霊社

合のおよ山品の石田と称し醍醐の南なり又延喜式に久世郡石田の神社と記す両所ともに宗祇八作の名所の西といひ後河八山科を用ふるもありて其所を定めがたし

詞花

山しろの石田の杜のいはねともひとのうちに秋て七月つけ　藤原為嗣

お捨遺

せり咲て見れ紅葉しろれいろの色のも匂ひけらん　後九條

美豆 淀大橋の南成の里なり大坂街道にしてむかし美豆の御牧とて廐あり

後捨遺

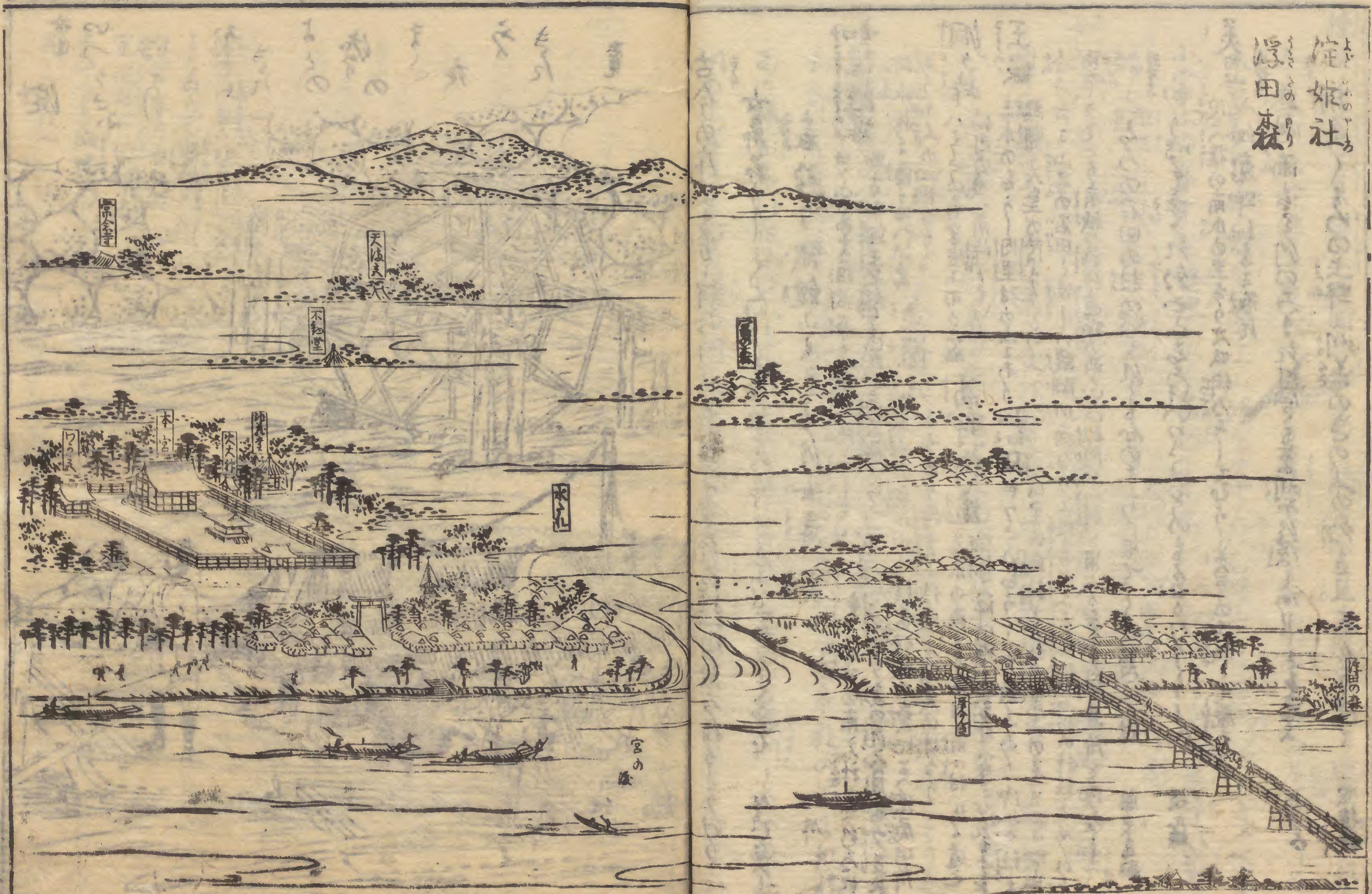
入江森野 和歌にも詠れ

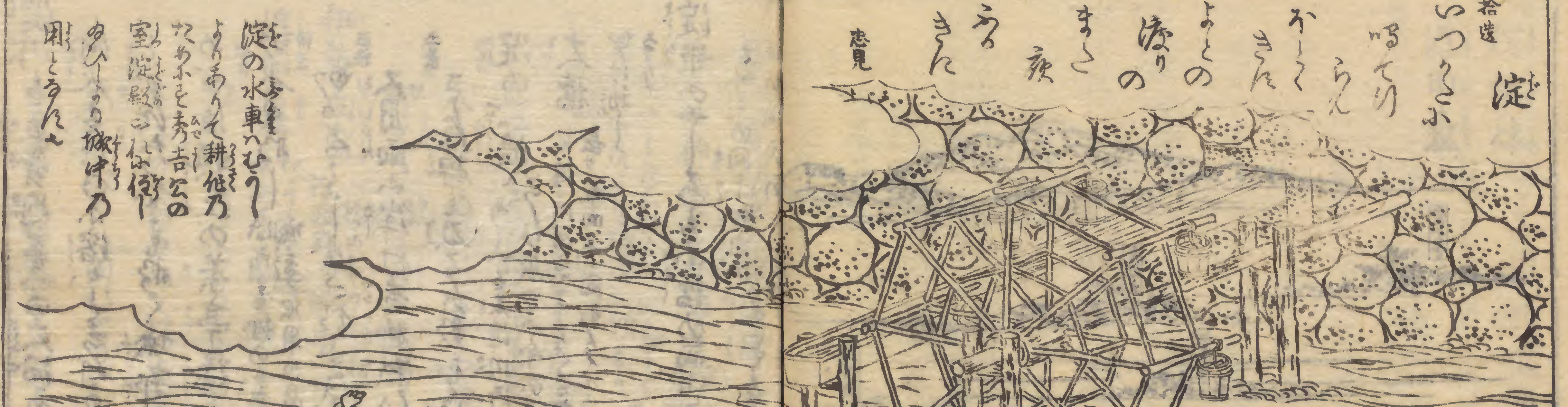
又月雨すこし川のみまわれて草刈る人も見えず　さがみ

續千載

胡るくまろの上野に刈萱のきの　かの紅も且おちりけり　順徳院

淀姫社（よどひめのやしろ）浮田森（うきたのもり）




淀
拾遺
いつかたに鳴てゆくらんほとゝきすよとの渡りのまた夜ふかきに
忠見
淀の水車ハむかしよりありて耕作乃ためなりしを秀吉公の室淀殿に住給ひしより城中乃用となれり

淀川は五畿内第一の大河にして六国の水落合て帰会す　山城 近江 河内 伊賀 丹波 摂津

河水は清く○に溶々として浩々たるのみ海のわく難波津へゆきて舟を渡し
こゝかしこにいくつもありて城郭の汀には水車ありて波に随ひ翻々と
めぐる領主の茶亭橋上のゆきゝ京遠々として見ゆるなりと
いふなるべし　此所は鯉の名産にして美味なり高貴の献上には城主より用ゆ故に常は遊猟を禁ずに

新古
ゆきくらしこれさへ京へわたしてさて淀の河瀬は月さゆるなり　公衡

風雅
五月雨に岸の青柳枝ひぢて梢を渡る淀の河舟　淳教

玉葉
さし棹も及ばぬほどに水に任せて下す淀の河舟　冬修

淀の大渡　いにしへは木津川牧の西より此に流れ宇治川と合し舟渡しあり
今の如く木津川と南へ遷せしは秀吉公の御制作なり

大橋　木津川のすゑにかゝる橋也　長サ百四十間あり
かけ初し

小橋　宇治川伏見の澤等の下流にかゝる　長サ七十間あり　城郭造営の時

淀姫の社　は小橋の西にあり祭神は二坐にして中央は淀姫神
右の方は間千観内供　若宮は本社の西にあり多宝塔には大日如来を安
画の間天神

置す当社は千観法師の勧請なり此所の産土神とす例祭は九月
廿三日神輿一基あり　宮の渡しは当社の鳥居前より桂川に落合て小橋の小渡への舟なり唐人雁木といふは朝鮮人
来朝のとき大坂より御舟にて此所より上陸し給ひし所なり　天神口　船ニ乗テ蔵神流ありて岩清水八幡宮の社あり
むかしより此所より座すなりしと

大荒木杜　いふは此かたわらにありしと
いひつたへり今さだかならず

古今
大あらきの杜の下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし　読人しらず

後撰
大荒木の杜の草とやなりにけむかりにだにきてとふ人のなき　忠岑

新古
郭公なほうとまれぬ心かな大あらきの杜のゆふぐれ　信明

伊勢向宮　小橋の西にあり天照大神を祭る所
淀渡なり洪水の時も流るゝ事なし

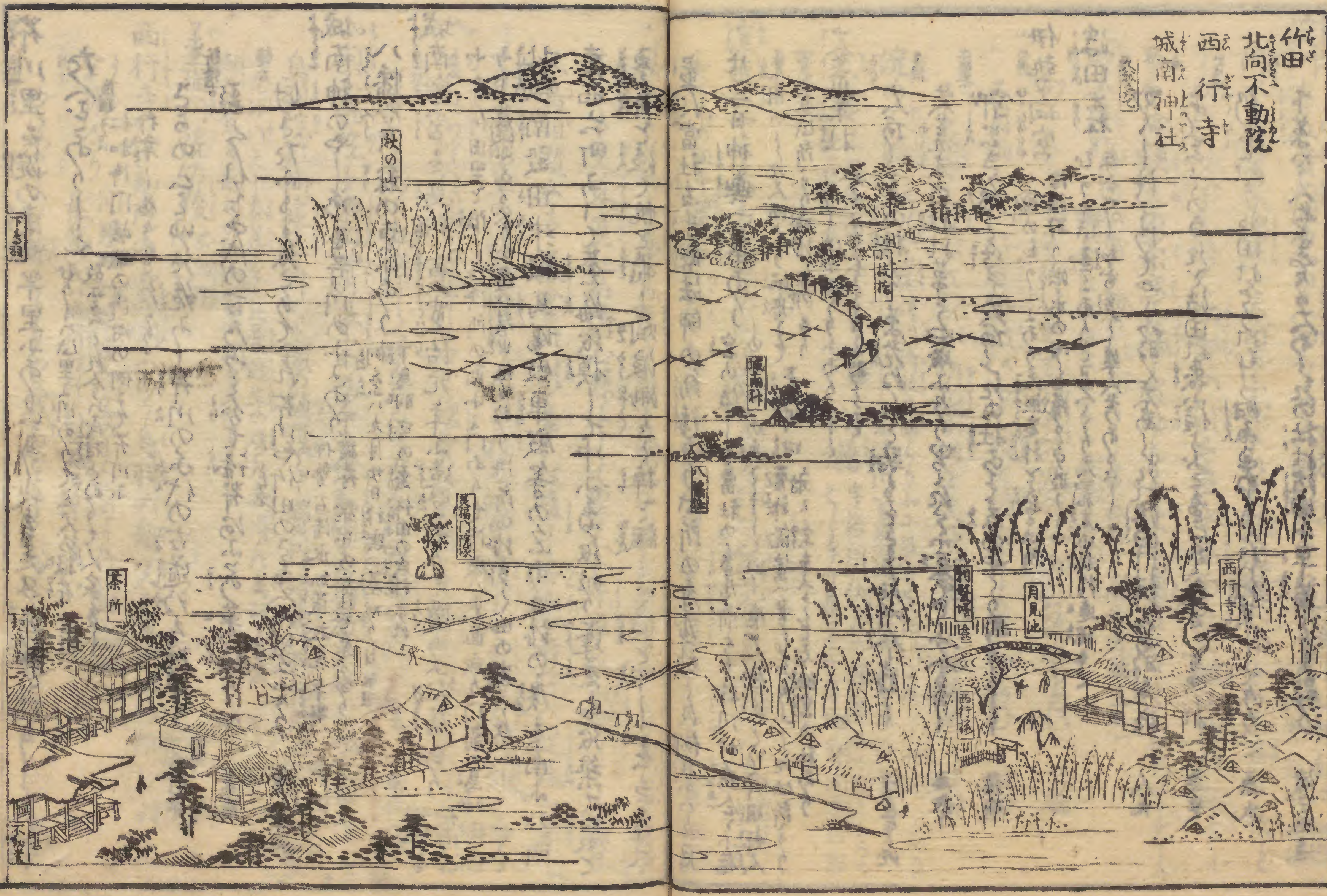
浮田杜　むかし此辺に在りとあれども大荒木の杜は連縄をもて
稀合せし和歌多し後人考ふべし

拾遺
かくしつゝ世をやつくさむ高瀬舟浮田の杜は我が住む所　人丸

金
あきかぜのふけゆくまゝに浮田の森にうつる月影哉　為実

新後撰
御を杜の浮田の杜のかたはらにいつしか紅葉しにけり　兼氏

續古
下草は人も刈らぬに大あらきの杜は浮田に早苗とるなり　津守国道


竹田
北向不動院
西行寺
城南神社
秋の山
小枝橋
月見池
西行寺
美福門院塚
茶所
観音堂
不動堂
下鳥羽

芹川里ハ淀の東北半里にあり　いにしへより天子遊猟の地にして行幸たびたびありし也　むかしハ此里に川ありて三人の根芹生たる故に名とせし　今ハ民村となりて人家多し

後撰　仁和帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける日　　行平

嵯峨の山みゆき絶にし芹川の千代の古道跡ハありけり

新続古　暮ぬれと千代の古道たどりて猶芹河に若菜摘らん　　家隆

続古　けふたにもよ所にてあそべ芹川や竹田のさなへ立にけり　　読人しらず

城南神のやしろハ芹川の北にあり

八幡宮ハ森の東にあり　例祭ハ九月廿日神楽二基あり且勤番　伊勢　石清水　加茂　松尾　平野　稲荷　春日の七社を祭るなり

城南離宮ハ鳥羽上皇寛治元年に造営ありて遷幸ありて仙居なり　下鳥羽塔の森竹田の民村にいたる

北ハ竹田里を限りとし御所の南にも門ありて御殿ハ東面なり門前ハ鳥羽街道にして淀に至る今の道ハ後世作りし所なり　御所の地多く田の字となる　旧地ハ芹川の…

北殿　南殿　田中殿　馬場殿　車殿等の名あり池の広さ南北八町　東西六町にして蒼海を摸して中に島山を作り蓬莱山を築て巌を畳　舟を浮て帆を飛し　烟浪渺々として棹を飄し　碇を下しまさに花の陰にて月卿雲客楽を奏し秋ハ池水に月を浮べ雲客秀詠を吟ぜ

上皇ハ元来寛仁の御心源にして里人に牛車の永ゆるしをあたへ

又鳥羽殿にハよく宸書の法華を写し安楽寿院の定海に命じて孔雀明王の法を修せしむされと法皇崩じて忽保元の乱となり

後白河院ハ此宮に蟄しまします　其後荒廃して遂に田圃となりしを見る

新続古　　鳥羽にて

面白く物悲しくぞ見えつる鳥羽田の面の秋の暮　　圓位法師

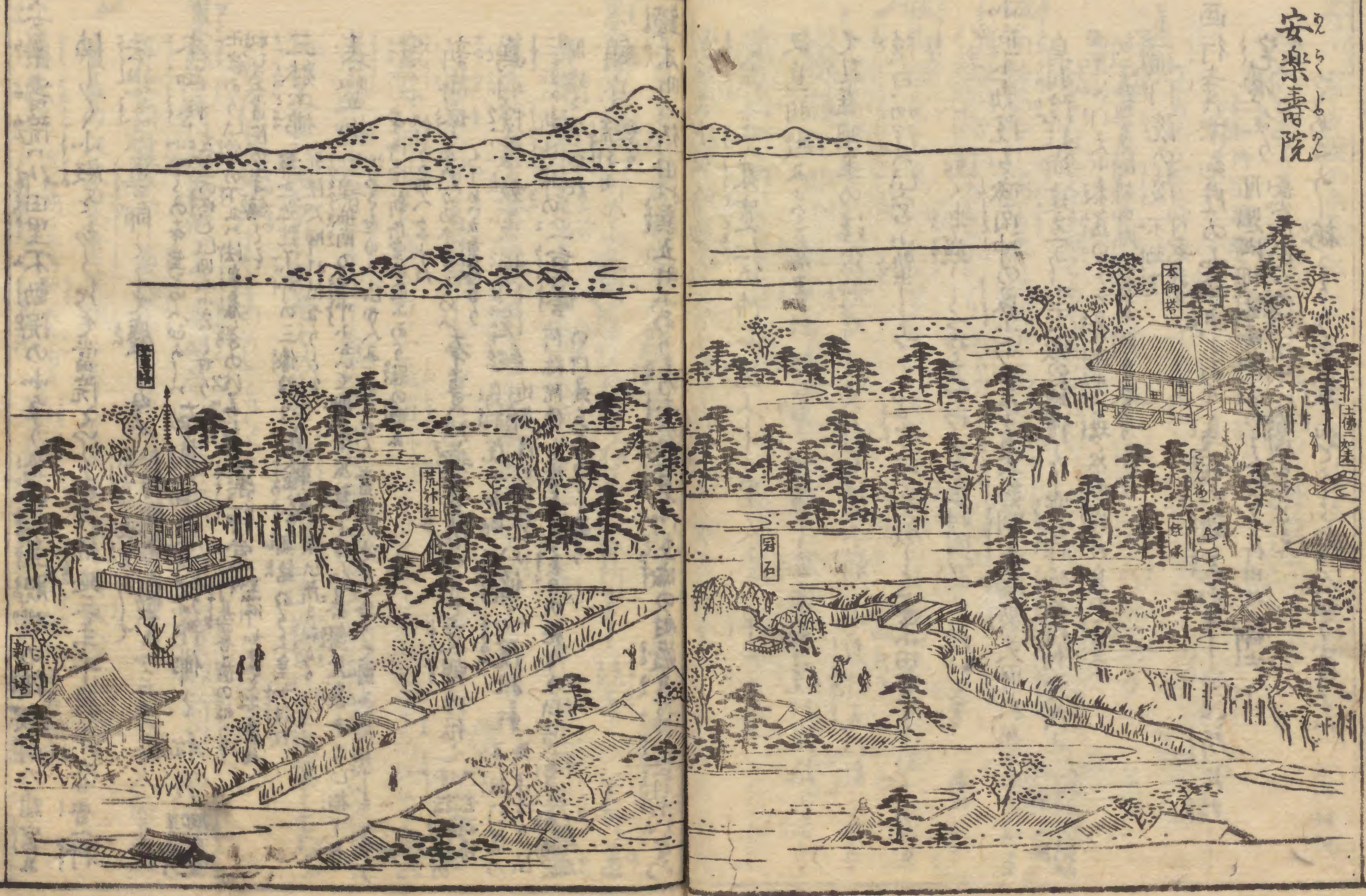
北向不動院ハ城南神の東にあり本尊不動明王ハ興教大師の作也　當院ハ鳥羽院の御建立にして王城の鎮護とし寶作延長の勅願所也　興教大師ハ伝法院の毘沙門天に参籠のとき最上往生の珠を感得し鳥羽上皇に献り不動尊彫刻の胎内首に收めたてまつりしを

美福門院の陵　不動院の門前にあり

西行寺ハ不動院の北西側にあり鳥羽の離宮ありし時此所に住し宅地なり　月見池　利髪塔　庵室の跡ハ今尚あり竹田村の郷士長谷川氏ハ西行法師の苗孫なりとぞ

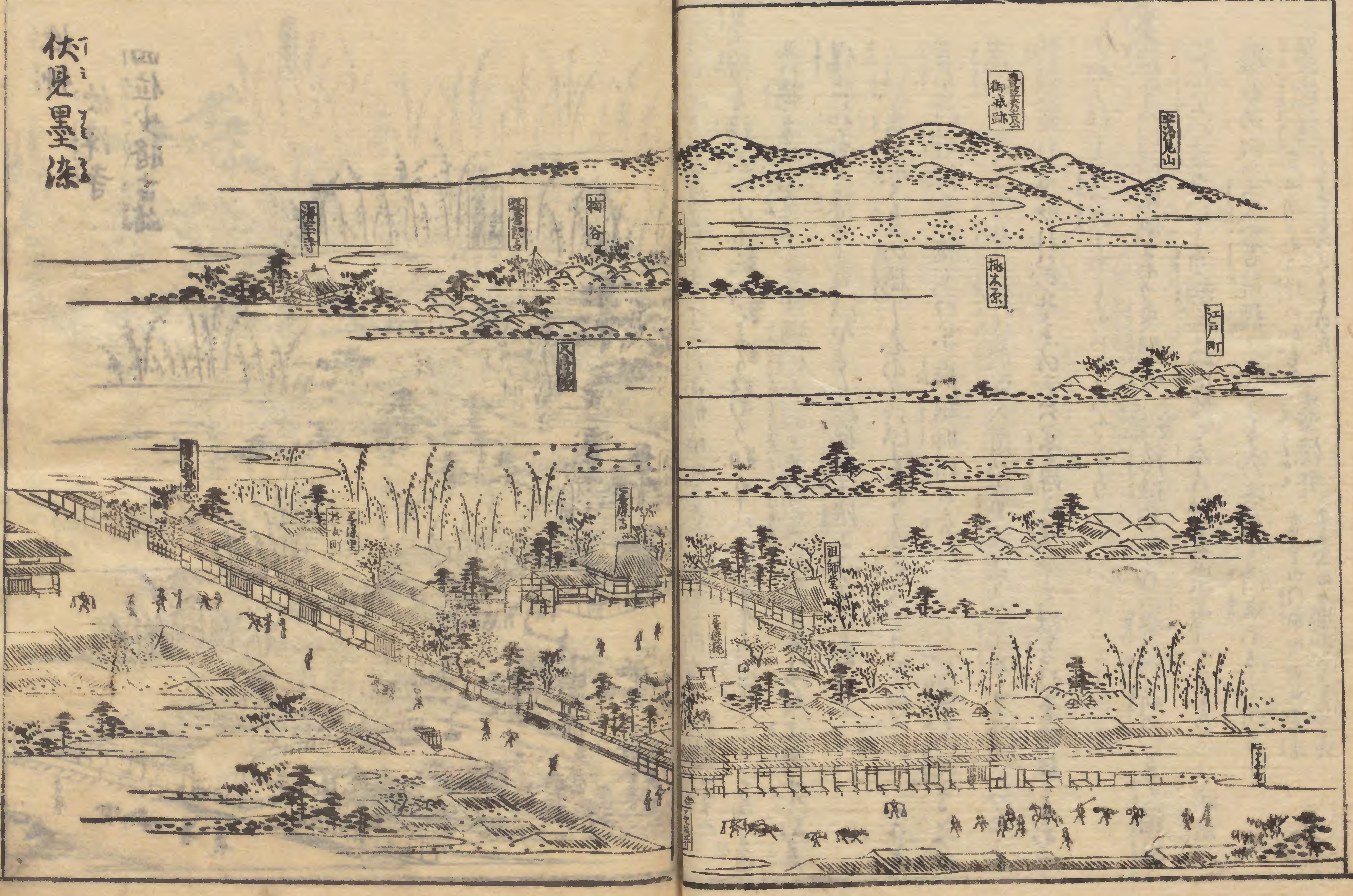
新古　とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人ハ折にこそよれ　　西行法師

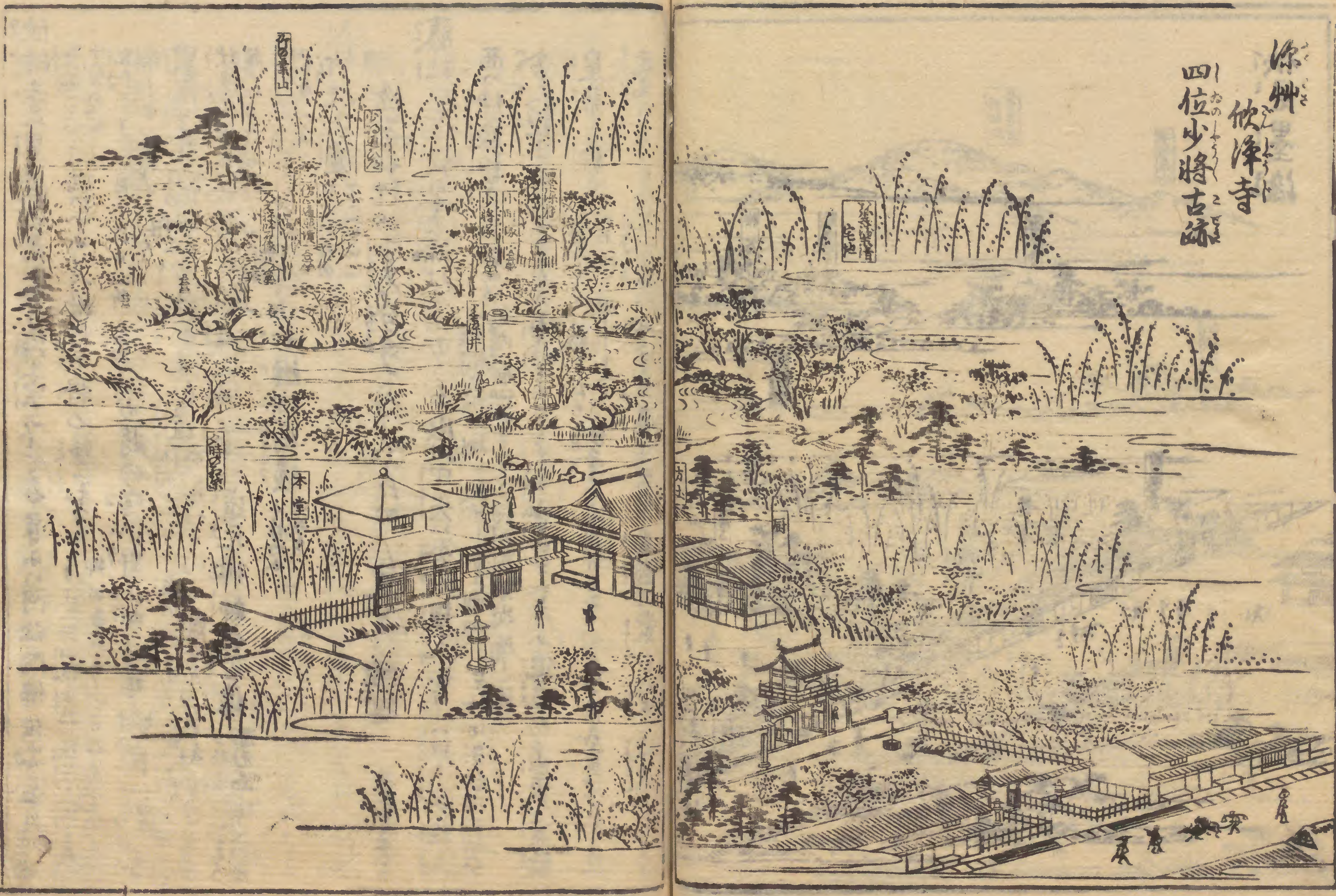
安楽寿院



安楽寿院は竹田里不動院の北にあり鳥羽上皇脱屣の後城南の離宮に
住ましく小殿をあらためて当院となしたまふ保延三年十月十九日覚行
法親王を導師として慶したまふ 宗旨は真言にして古義新義ともに修学す
本御塔 北のかたの本堂をいふ本尊は卍字阿弥陀仏と称す 尊像の胸に卍字あり
五重の塔の跡ゆへに名とせり 卍字あり此堂の下には法皇震筆の法華経を収む日本当院の寺鎮とぞ
薬師堂 行基菩薩の作りなる薬師如来を安置す
三躰仏 釈迦弥陀薬師の三像なり
五輪塔 無銘なり上皇如法経を此所に収らる
碁盤梅 弘法大師の作なりとぞ 上皇城南の宮中において囲碁を禁じ給ひ碁盤を集めて此樹下に埋めさせ給ふ 此ゆへに名とせり 当院は今に至りて囲碁を禁じたるなり
冠石 何なるゆへ名とす 本御堂新御堂の向ふにある冠の形に
新御塔 南の方の本堂をいふ 本尊は地蔵菩薩にして定朝の作也 そのかみは五重塔なり
鳥羽院震翰美福門院 鳥羽院の女御 八条女院は美福門院の御子なり 此 近衛院の御母也 美福門院の御念持仏
三級は新御塔の二重塔 阿弥陀仏を安置す 春日の作なり 此塔は豊臣秀頼公の御建立なりしなり
脇壇に安置す
鎮守 荒神と祭る

撞木町は竹田の北五町にあり秀吉公伏見御在城の時遊女を掃除前京八条の
といふ所の北に慶長九年十二月に傾城町免許ありし所なり 今は新地にて荒廃に及ぶ
墨染は撞木町の北三町ばかりにあり むかしは此所まで深草といひて野道なり
又は桜多し 寛平三年堀川太政大臣昭宣公薨じ給ひし時上野岑雄
僧都の和歌を詠せしが此ゆへに桜墨染に咲しとなり
古今 深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け みねを
菅公は神詠には梅をもって北飛越師雄この奉ひし天人は寝覚の枕にまみえ
嵩山の松を青牛と化し康頼入道の宝物集には草木心なしといへども
物のあはれ知れかし其の木は墨染に咲今に深草に墨染桜とてあり
とかくれしは其の頃までもありしとなんいへり
墨染寺は旧所南側にあり貞観帝 清和天皇 御誕生のはじめに宝祚祈のため太相国
忠仁公の建立ありし貞観寺の旧地也 今は法華宗にして日秀上人開基也
慶長の比は方丈書院魏々として秀吉公も御成ありし所なり
墨染桜 堂の前にあり件の和歌によりて名づくるものなり 墨染井 当寺の門前町の西茶店のうしろにあり由来さだかならず


伏見墨染
御城跡
梅谷
江戸町



深艸欣淨寺
四位少將古跡

欣浄寺ハ墨染の南にあり浄土宗にして本尊ハ阿弥陀佛 安阿弥作 立像
聖徳太子十六歳の御作也此地ハむかし深草少将の第宅なり 寺記に曰四位少将ハ深草大納言義平卿の長子にして
弘仁三年十二月十六日此所よりかよひ少将の塚 小野小町の塚 堂のうしろにあり
卒しけるとなり 池の汀に少将かよひし道 池の向ふ森の間にあり 小町が住し宅地へ通ひしといふ
墨染井 あり 此池の北に 道元禅師の石像 道元禅師入宋の
犬見の城ハ所謂あらそひの此道を通り給ふ
預りしてこの竹の谷につひに隠れ給ふ
深草所にこゝろしめて禅寺を営みけるなり 七瀬川局壇 石像の上にあり
竹の下道 から人の
深草や竹の下道分きてうしろかへれば雪の明朗 前関白良経公

藤杜社ハ墨染の北にあり本殿の中央ハ舎人親王 東の間ハ早良親王
西ハ伊豫親王を祭る 大本朝武功の神と配祀しける神武天皇神功皇后 武内宿祢等敵を引弓兵政所と號す
舎人親王ハ天武天皇の皇子にして天平寶字二年に追尊ありて崇道盡敬
皇帝と號す 日本記を撰し給ふ 崇道天皇ハ光仁帝の御宇五月五日にして武具を帯して
走馬ハ五月五日也 光仁帝の御宇天應元年に異國の蒙古日本へ攻来るとし
彼へわたしで天皇の第二の皇子早良親王を大將軍として退治あるべきよし
宣旨を蒙り親王当社に祈誓して五月五日に出陣し給ふ神威いちじるく凶暴
風たちまち吹来て蒙古の軍船悉く沈みしとぞ是より以来吉例として毎年軍陣
の粧をなし天下平安を祈禱し給ふ 當社を弓兵政所といふ此所謂ハくらしもつへ
旗塚 本社の東の山にあり神功皇后三韓退治の後旗をおさめ埋めおかれしとなり 蒙古塚 當社森の中に七ツあり 今深草退治の後蒙古の賊の首を埋しといふ
ときつく埋て神威を 力石 ちからくらべの石あり
深草野ハ藤の森の西の方のかしハ大亀谷にして竹田里南ハ墨染北ハ稲荷
を限るなり 欽明天皇いまだ幼くましまし時夢に化人來りて君わし
秦の大津父といふものを求めて補佐とし給ハゞ天下安泰ならんと告るまゝ
後に勅して曹司に召給ふ容を圖して尋させ給ひけれバ此深草里に住る是
此運で朝觀し天皇践祚の時大蔵卿に任じ給ひけれハ四夷隣国に從ひける
なり日本記にみえけり 桓武天皇の陵ハ東の山の平谷口といふ所にあり 車
塚ハ天皇の御車を埋し所といふ 御輿塚 鎮守松 霞の谷 霧の谷

深草天皇の建給ひし嘉祥寺も今ハ嘉祥寺畑と號く寺ハなし。あさるの
塔ハ元慶八年に建られしと近江の国米百五十六斛丹波の国米二百七十
九斛に負ハ觀錢十二貫文勅して寄附あるよし三代實録にみへたり仁明
帝の陵同女御貞子の墓あるハ左大臣冬嗣公の別業大納言時継卿の山
荘眞幡寸社拜志寺大日寺後深草院の陵昭宣公の営ね極楽寺も
今ハ里の名とのミ遺りぬ深草の郷中ハ高貴の別荘名賢の古
廟霊佛の寺院かぞくおほしかども千載のむかしとなりて村老の口
碑にのこ聴ぬ桑田碧海須臾にかはるへしとかなしむへし

新古
深草の里の月影さひしさも住こしまゝの野への秋風　通具

集古
つゆしけみかりふせし人のかよひ絶て積れバ雪乃深草の里　為氏

鎌千
深草や竹の籬のふしかたえて荒にし里に衣うつなり　兼経

鶉の床ハ深草野の叢に巣くむをいふて
山野に鶉の床といふ所一所ありし竹の葉山の奥なりと後世和哥よミそのところをさしてよめるもの也

むかしより鶉の名所にして今ハ佛境に属れりといへど都下の詞客中秋
の頃ハここに来りて月下に鶉聲を聞て鶉のあはれなる野に鳴そのこゑ聊秋のあはれを添る
ゆかりし里としられけれバ深草ハ鶉にて知られたるなり
深草に鶉の床を詠合するハなをその縁なり

千載
夕されハ野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草乃里　俊成

此哥ある人難じて曰く秋風そらさひしきに加へしかとらひし故
俊成の答へにハいかにも只秋風の身にしむとハいへども只曲なし鶉を添て情を聞もあへる所
也も耳にしみて鳴そてふかきをしらへさせんとかくて衝人聴を
消して逃しとなり

續古
深草の山のすそのゝ浅ちふに夕風さむく鶉なくなり　前中納言法印

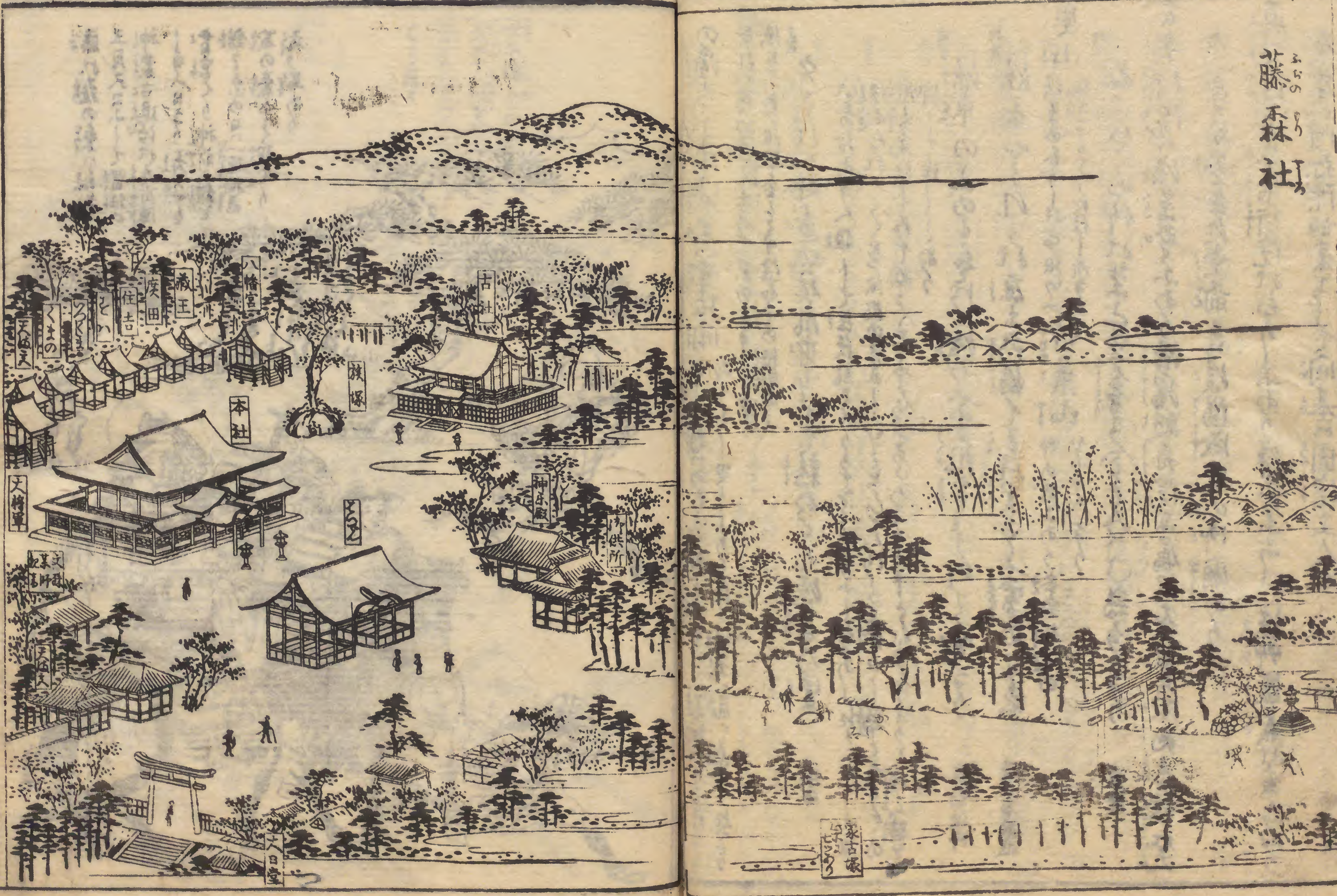
新拾
深草やうつらの床も跡絶て春の里とふ鶯の一声　権大僧都

奥山
深草のおくにある竹の葉山安楽行院の後にあり
猿丸大夫まよひ入し所なり

續古
ぬれくらや竹の葉山の奥まて人そみへし鶉なくなり　家隆

安楽行院ハ深草郷にあり後陽般舟院に属て本尊ハ不動尊歓喜天
の二尊安置の堂前より後陽成院の御廟あり
眞宗院ハ安楽行院の北にありて浄土宗にて深艸流義の本山なり
本尊ハ阿弥陀如来にして開基ハ圓空上人と

藤森社



藤の森の祭ハ毎年五月五日にして當社の神蒙古退治の為出陣し給ふ日なり考ふるを當宮より神前に鎧を錺て祭の日ハ一ノ森稲荷の森ふさく翔走り馬あり
常夜燈
世に端午の佳節に武者人形をかざるハ蒙古退治の吉例なりとぞ

瑞光寺は深草極楽寺村にあり佛殿の本尊は釈迦佛（長六尺胎中に五臓六腑あり）明暦元年に元政上人草創ありて法華の道場とし給ふ（当寺境内の旧跡を薬師堂といふ古は極楽寺の薬師堂の遺跡なり）

元政墓　佛殿の西にあり塚のうへに竹を植て元政法師常に携ふる人作の杖を立しか枝葉茂りしと

遊の記え政旧庵にて
この御門日ごと宗ふうれて常の佛にねもころへを
たゞ釈迦のみ手にうくるとそまつりける

落れぬは釈迦に涼しや秋の色　鬼貫

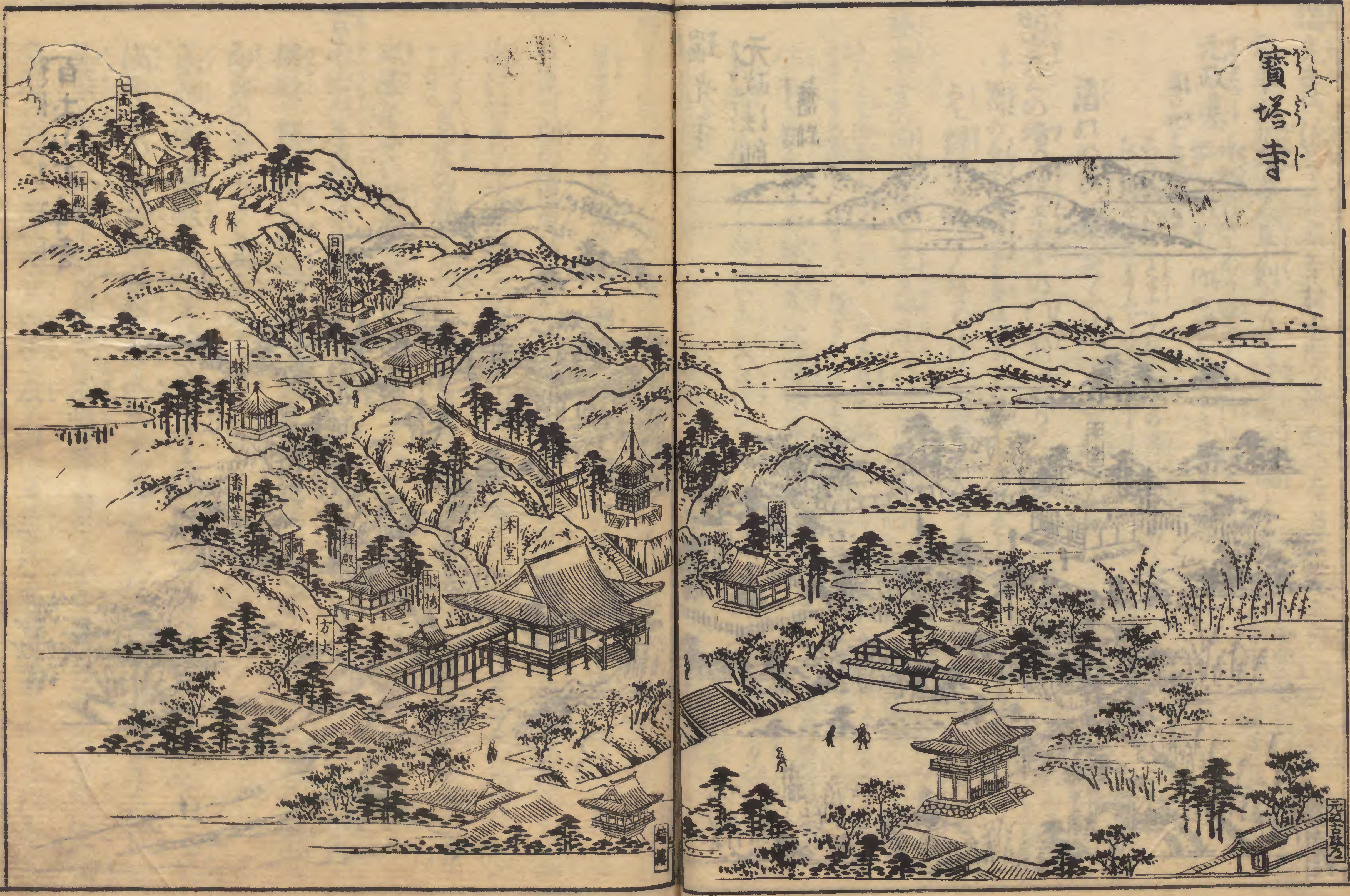
昭宣公の墳は瑞光寺の門前にあり大塚にして巡十間余上に小社あり（三十歩許）

古今　堀川の太政大臣昭宣公身まかりける時深草の山にをさめてのちによめる
空蝉はからを見つゝもなくさめつ深草の山烟だにたて　僧都勝延

極楽寺の旧跡は宝塔寺瑞光寺の境地也（大鏡に曰深草天皇芹川にみゆきありし時帝に御供あり昭宣公幼童の時の琴の爪を落し給ふ）これも供奉し爪のうせけるを歎れ諸佛に祈りて白山の爪を求る所に御堂を建んと誓ひの果して此里にて得給ひしかば帝に上り遂に極楽寺を創建ありしと

保胤が極楽寺の賦に東山の勝地象外の境壺中の天にて異なり碧羅山あり翠浪の湧か如く谷水は玉虹の流をなせり山はおゝきしといへども直に勢千万仞の山に柱なる如し飛泉あるを細しといへども直に千尋遠境に聞ゆるなり（今の宝塔寺七面山の麓なる所なり）

瑞光寺
元政法師旧跡

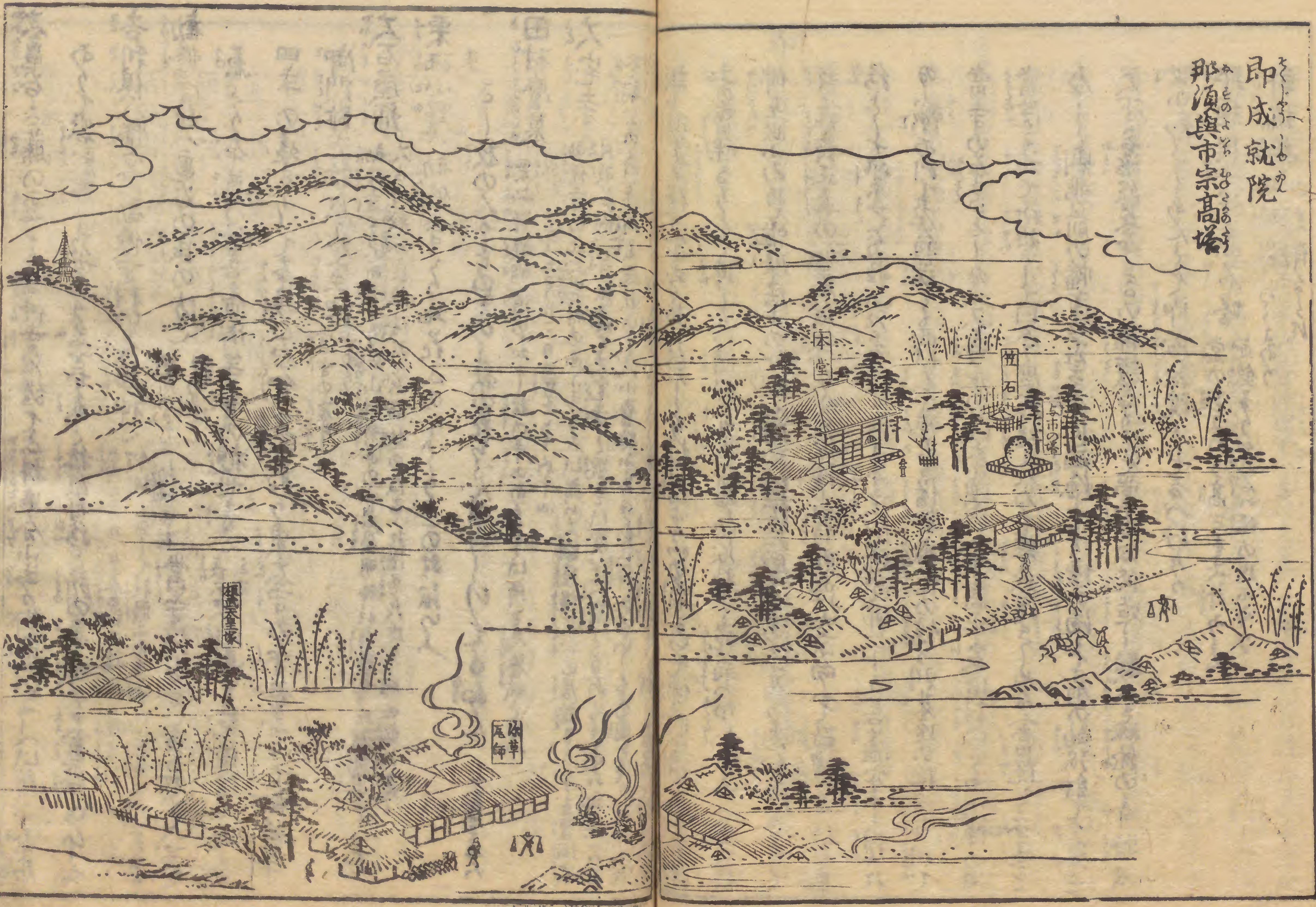

寶塔寺
七面社
拜殿
千躰堂
番神堂
拜殿
本堂
方丈
寺中

深草山寶塔寺ハ瑞光寺の北にあり法華宗ニして本堂ハ釋迦多宝の二尊高祖日蓮上人の像を安置す廟塔ハ日像上人の也題目の石塔婆ありて其下ニハ日蓮日朗の遺骨を収む これを宝塔と称す 日像の説法石ハ釋迦千財堂の内ニあり鎮守の社ニハ三十番神を祭る七面明神社ハ本堂の後ニあり是經宗ニ擁護せる神也 祭ハ九月十九日也 鳥居の額ハ元政上人の筆也當寺ハ舊極楽寺にして真言律を兼より延慶年中に住職良桂律師日像上人の教法に歸して法華道場と改む

百丈山石峰寺ハ宝塔寺の北ニあり開山ハ黄檗の六世千呆和尚也 退院の後此ニ隱棲し 佛殿ハ釋迦佛額ハ濟世法王又左右ニ聯あり共ニ千呆の筆也表門の額を即非の筆ニして高着眼と書け

薬師堂ハ佛殿の前ニあり本尊薬師佛長四尺恵心僧都の作ニして多田満仲公の念持佛也村上帝御宇天徳二年ニ攝州多田郷ニおゐて満仲公伽藍造営ありて曼陀羅連山石峰寺と號し此本尊を安置す其後文永の兵火の時ニ諸堂回禄ニ及ぶ故ニ此像を石函ニ収め土中ニ埋むなり

霜星累りて慶長元年の春沙羅山に夜〻光あり郷人これを怪み其光の本
を穿しに一ッの石函を得たり蓋に沙羅連山石峰寺薬師仏の銘あり則一宇を
営て安置したり同八年に庵主宗玄といふもの夢中の霊告あり斯近き所に
寺を遷し安置せバ普く人民を化益せんと宣ふ宗玄仏意に任て自ら肩に負ふて都
にかへり五条にいたり因幡堂に暫く安奉し程なく五條の橋東若宮八幡のほとりに
堂舎をいとなみて石峰寺と号す宝永ハ須黄檗千呆和尚常に此寺に詣で
薬師堂に尊信ありて曰我異国より日本へ渡り黄檗山の祖席に司職たる
事偏に霊仏の応現なりとて厚く瞻礼恭敬せられたれども 公命ありて
今の如く百丈山と云しも此尊像を移し石峰寺とぞ号しける
茶碗子 諳泉の銘ハ当寺の門前南のかたにあり 茶の湯に可なりとて好人たち賞翫ん
即成就院ハ源草創ならし大亀谷にありて本尊ハ阿弥陀仏の坐像也脇壇に二十
五菩薩あり是ハ恵心の作也此霊像ハ恵心僧都叡嶽横川にありて説法しける時
其人の老翁来りけれバ我ハ南伏見里に住ものと一筒を捧ん来れる恵心其
詞に応じて仏の為に其指月のかくれ此庵より出の翁と云いて仏の向に消し極楽浄
土の宝珠なりとて捧しかバ僧都奇異の思ひをなし老翁ハ何人ぞと問ふに答て我ハ
仏在世にありし唯摩居士の化現也師の法徳を感じてまのあたり恵心僧都を来りて
拝し其ハ正真の如来を拝せんと願ふ翁則西の空に向て敬礼しければ忽
然として紫雲をなびかせ音楽と共に本主阿弥陀仏二十五菩薩空中に現れ
給へバ老翁諸とも西の天に飛去る僧都感信の餘り則来迎の相を自刻で
当寺の本尊とし給ふ又寿永の頃奈須与一宗高平家追討のため出陣の時
当院に詣で祈誓して曰今度戦場において誉を得さしめ給へ当院を再建せと
誓し則仏前の幡をとりて笠印とし西海に下り壇の浦にて扇の的を射て名誉を
天下に落したり是本尊の擁護なりとて堂舎を修造し願を成就の奇特を
世に知らしめんとて即成就院とぞ名づけける
那須与一宗高石塔 堂の前にあり高さ凡五尺計にて 無銘なり笠石ハ堀の内にあり
軒端梅 塔婆のむかふにあり 由来詳なれば


即成就院
那須与市宗高塔
本堂
笠石
与市の墓
桓武天皇塚
深草瓦師

大亀谷 之藤の森より勧修寺へ行道て山林追分に出る街道をいふ。此所に茶店ありて容顔艶しき女あり名を於亀と称く自然と所の名に呼て大亀谷といひしとぞ

吉利倶八幡宮 ハ勧修寺村の産沙神也 祭ハ九月廿八日也 当社の神木に種字顕れ阿弥陀の梵字なり 今枝くれて社頭にあり

勧修寺 ハ大亀谷の艮の方也 此所の名ハ勧修なれど当寺ハ古ハ薬厳ミ言を兼より本尊ハ延喜帝御等身の観世音也 長五尺 開基ハ範俊僧正延喜四年の建立にして本願ハ右大臣定方なり東大寺の寺務にして勧修寺御門跡と称ス

氷室池 当寺の庭中にあり

大石屋舗 勧修寺より七町ばかり乾山科郷西の山岩屋明神の馬場先北側森の中にあり 大石内蔵助良雄浅野家断絶のはちに潜居せし近年碑の銘を建る

栗栖小野 ハ勧修寺より北花山のふもとの野をいふ

後拾遺 さし枝のくるまとめ栗栖の花ちらん時ふりしそめん　大納言経信

田村麿墓 栗栖野醍醐道の辺り林の中にあり今此所を馬脊坂といふ 弘仁二年五月廿三日薨ス年五十四

大宅寺 勧修寺の北大宅村の南にあり古此所ハ大織冠鎌足公の居館あり今ハ曹洞宗 月坡和尚一宇を建て大宅寺と号ス此里を大宅といふハ東院大臣冬嗣公の御孫高藤卿秋のころ小鷹狩に出給ひし山科のあたりにて[illegible]馬飼ふ人供してとある門の内に入給ひしに[illegible]今宵ハ此家に宿り十三四ばかりの女のおかしげなるに契りなされ佩かせ給ふ太刀一腰残しをきたまひぬ其後六年を経て尋ねさせ給ひし此家のうちにかの女ひとりの女子をいだきて立出たり藤よ居たりし此児ハ御子なりとて[illegible]のちに立出て[illegible]とゞめてありしも前の世の契りあさからずとて御所に伴ひて帰り西の対におかせ給ひ女子二人誕生あり高藤卿の大納言になられし男二人ハ醍醐の大将定国三条右大臣定方なり姫君ハ宇多天皇の女御にまゐらせ醍醐天皇を生せ給ふこの御所を勧修寺となされたり弥益ハ四位にのぼりて家を今の勧修寺となせり(?) あらはれたり 已上小世継物語の大意

興福寺の旧蹟 大宅村のかたはらにあり旧号を山階寺といふ 興福寺橋ハ岩屋の社鳥居の東にあり

松杉池 岩屋の社南の森にあり松杉みちたり

小野随心院 ハ勧修寺の東に曼荼羅寺と号し真言宗にして開基を仁海僧正 開基仁海ハ小野僧正といふ 僧正之法務ハ小野御門跡と称し摂家御連枝住職しなり

二年六月大に旱し北僧正に勅して神泉苑にをいて請雨経の法を修せしむ 寂年九十二 其後九度詔ありて皆雨をふらしむ世人雨僧正と呼ぶ永承元年五月十六日 已上元亨釈書

小町水 門内南の森の中にあり此所ハ出羽郡司小野良実が宅跡にして女小町此水を愛し朝夕粧ひしとぞ

栢の樹 園のうちにあり此地に百夜かよひし榻を重しありしとて

深草少将の通ひ路 醍醐往還の西側森の中にあり黒染の南欣浄寺より小町の宅へ百夜の間かよひし所なり竹林といへども今ハ竹一株もなしといふ

櫻塚 小野村の西にあり小町が文塚ともいふ 一説ニハ後小野宮道の墓ともいふ

野色山 道の西にあり小町之

貞塚 四位少将百夜通ひし榻を積し所なり

下醍醐
しものだいご
五重塔
本堂
小町の水
八幡
清滝社
毘沙門
白山

上醍醐（かみのだいご）
五大堂
白山社
開山堂
清瀧社
薬師堂
岩間寺道

深雪山醍醐寺ハ小野南なり山上を上醍醐とし麓を下醍醐と號ス宗旨ハ
眞言宗にして修驗道之（此所を當山と号ス本山とハ聖護院の流義）開基ハ聖寶尊師（理源大師と謚す）
延喜四年の建立にして醍醐朱雀村上三代帝王の御願なり
法務ハ三寶院御門跡と称し（摂家の御連枝）これに任せらるゝは當山を醍醐と號するを聖宝
尊師佛法相應の霊地を得んが為に七箇日祈念し給ひしに五色の雲當山の
峯に聳ゆ則ち山に登り給ひしに獨の老翁來りて清泉を嘗めて
醍醐味なりといひて尊師にあたへ又此山ハ古佛練行の洞諸天衛護の砌前
佛の遊處名神の所居之これ是地主の神横尾明神之永く此地を守る師
に獻べし早く精舎を営て廣く佛法を弘群亦を利しめて擁護せんと
云終て見へず又指の為に三寶を唱へ尊師弥感涙を流し此由を上奏し
延喜帝深く叡感ありて除病延命のために當山の諸堂を造営しあり
本堂（後に薬師如来を安置し秀吉公の御建立なり）回禄の 開山堂（弘法大師理源大師の像を安置す）五重塔（佛言說相の）
曼荼羅を 清瀧権現（沙伽羅龍王第三の姫なり）藤戸石（三寶院の庭中にあり）

藤戸浦にて佐々木三郎盛綱高名せし浄洲の
岩也天正年中聚樂亭より此所に移れ
長尾天満宮（本堂の北にあり九月九日にして神樂）花見山（秀吉公花見遊宴の地也 天正軍記 小牧）
（二基あり醍醐郷中の産沙神とし）
上醍醐（麓より山上まで五十町ばかりして一町毎に標石あり石面に梵字をきざむ 權僧正成賢のたてらる所なり其桶 不動堂より女人の登山を制禁す）
清瀧社 龍神社 石社 醍醐水（閼伽井とも）五大堂（不動明王を安置す 開山聖寶の作四尊は）
理會僧都の作なり延喜帝勅願にして朝敵 如意輪堂（本尊如意輪觀音を安置す）
平將門降伏のためにもちひられし本尊なり
聖寶の作なり西國順禮所 薬師堂（本尊薬師佛ハ恵理僧都の作なり堂内に准胝觀音を安置す觀賢僧正の作）
にして第十一番なり
傍にあり 祖師堂（中央聖宝尊師南ハ弘法大師北ハ觀賢僧正を安置す）
むかし聖宝尊師ここにて悪蛇を退治し給ふ二丈の銅則聖宝の作なり悪蛇
の鱗二尺ほどもあり 寂静谷（祖師堂の北にあり毎年七月五日六日當山の千日）
堂内にあり 詣とて群參し此所までものぼりけり
籠
なり
又當山ハ松杉蓊鬱として常に白雲掩ひ諸を封じ山花巍々と聳
えて旭日の出る事遅し霊泉ハ混々として玉を注ぐが如く堯の時德
茂し清平の代に醴泉出夏后の時俊才官にある時も則醴泉涌くと
云しも此醍醐水のたぐひなるべし

醍醐天皇陵は三寶院の北人家の東にあり 人皇六十代の帝御諱は敦仁 宇多帝第一の皇子也 位に卽三十三年 延長八年九月廿九日崩じ給ふ 壽算四十六 延喜御門と稱し

朱雀天皇陵は同所陵町にあり 醍醐帝の皇子にして六十一代の主上なり 在位十六年 天暦六年八月十五日崩じ給ふ 聖壽三十歳 天暦御門と稱す

一言寺は醍醐の南里にあり 眞言宗にして醍醐寺に屬す 本尊は千手觀音にして安阿弥の作 又内侍堂は當寺の本願阿波内侍の像を安置す 少納言信西の女なり

直谷南禅院は醍醐山の巽にあり 成賢僧正隠遁の地なり 本尊は阿弥陀佛の坐像にして春日の作なり 側に地藏尊を安置す 此里は農家常に尊信し これを一夜の地藏 世人田植の地藏と號す 多くは田を植るしるを

笠取山 醍醐の巽にあり 民村多し 巽の峠に山城近江の國堺あり 岩間寺は醍醐より三町ばかり東にあり 石山寺へ一里あまり

新古 一本もあらぬ木ずゑのたくひやなかるらん 村雨そゝぬ笠取の山 西行

後撰 笠とりの山をたのみしかひもなく時雨に袖をぬらしてぞきる 頼基

一言寺

日野薬師

日野薬師ハ一言寺の南日野村にあり法界寺と号す本尊薬師如来ハ金銅の坐像也日天月天十二神十二王等運慶の作にして左右に安置す 世人乳出の祈願有

最も霊験あり 舊阿弥陀堂にして後壇に丈六の弥陀の像を安置す

定朝の作也初ハ日野右中辨資業卿の本願にして諸堂魏々たり勅書

堂ハ五大堂大門の蹟今田畑の字となりて當寺のまへにあり日野村すなる則

日野家別荘の旧跡あり 今土人内裡の芝といふ

重衡の塚日野村茶園の中にあり 三位中将重衡卿治承四年南都東大寺興福寺を炎のうちに焼失しけるゆへに大仏殿を重衡卿の方へ納言の後重衡ハ鎌倉より奈良へひかれけるを木津川にておかされしを北の方佐局ハ日野におハせしが骸を東大寺の聖俊阿闍梨の坊よりもらいうけて法界寺にて煙となし骨をバ高野へ送り墓を此所に築しとかや くハしきハ平家物語にあり

長明方丈石ハ日野村の東にあり五町計外山の腰にあり石床二間四面高さ弐丈計一説に名を千人石といふ 絶景左ハ笠取炭山の往還あり此地ハ地勢の風景方丈記にくハしく右ハ岩間の嶮にして遠近の佳境一眼の中に遊ぶ所あり炎暑の節ハ岩の舌より涸ハせんげんあふれ弘法大師此巖を穿ちてとぞ 巖の中より清泉涌出る

東鑑に曰建仁元年十月十三日鴨社人菊太夫長明入道 法名蓮胤 依雅経朝臣之擧此間下向奉謁将軍右大臣實朝公云云

方丈記に曰
住家ハ則浄名居士の跡をけがせりといへどもそのところハ周梨槃特が行にだにも及ばず又そのすまひ貧賤の報のみづからなやますわづかに聖衆来迎のをりをまつのみなり名所を見て不退の念佛を申すよし是によりて延暦の二十七年十日ばかり外山の麓にてすまひけるに

月かげハ入山の端もつらかりきたえぬひかりをみるよしも哉 長明

石田杜ハ醍醐の南にあり石田社ハ民家の中にあり天照太神日吉山王を祭る此里の氏神とす 和名抄にハ石田の小野と詠る

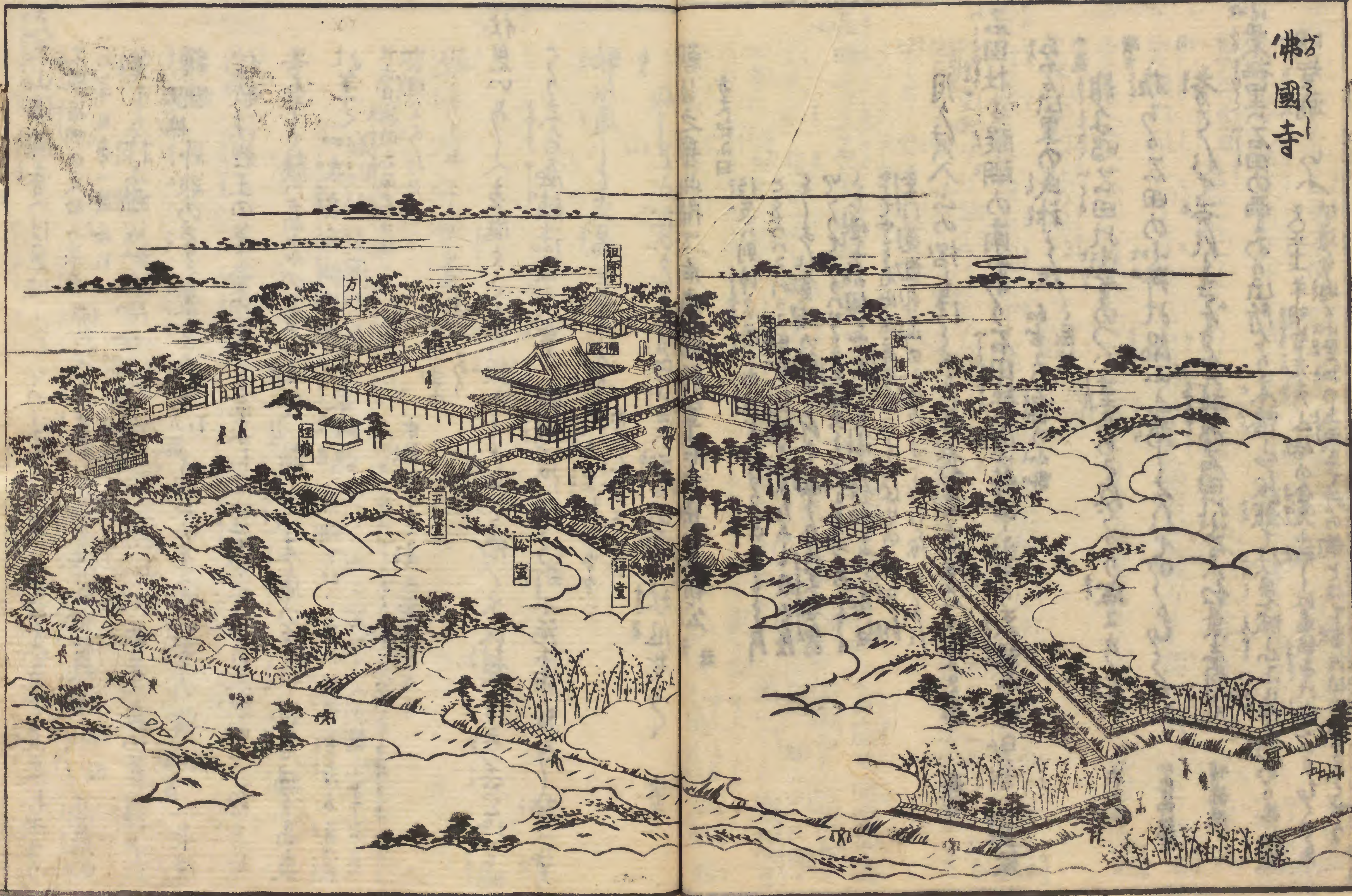
千載 雉子鳴石田の小野のつぼすみれ色がなくともしるべなりけり 兼季

續古今 稀ちる石田の小野の風に山かつらしくれてやむもとこそ 中務卿親王

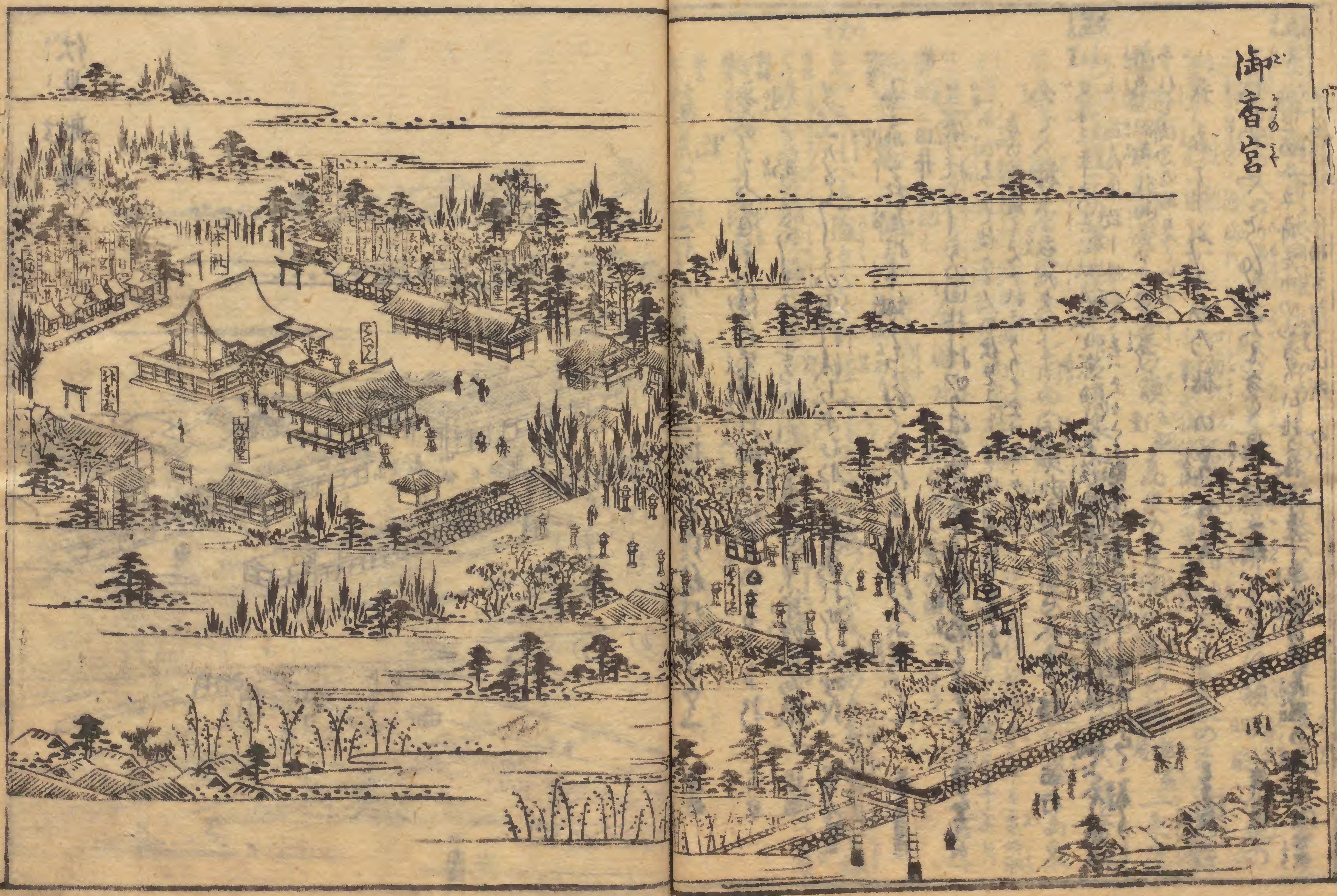
日 考えれそ安ねきそすん繁あ石田の小野ハ紅葉なるらん 順徳院

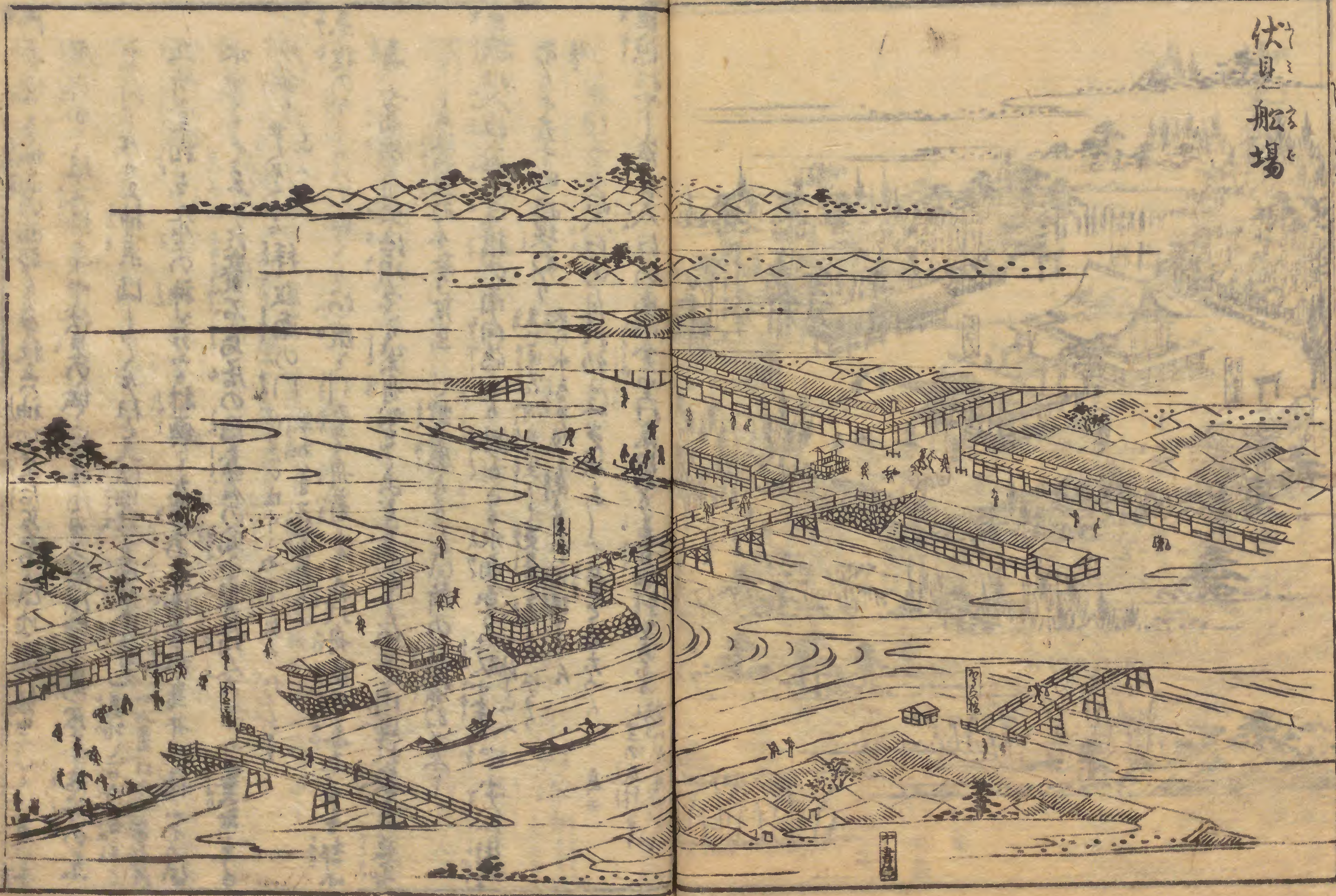
小栗栖里ハ石田の西にあり此所の本幡といふ坂
明智越といふ 天正十年明智光秀山崎の合戦に敗し江州坂本の城におもむくとて此道を過る小栗栖の土民出て竹の鑓を以て害せしハ此所の人にてありとなり

佛國寺



天王山佛國寺ハ伏見城山にありしものより黄檗山五世高泉和尚なり
大明福州の人なり承應三年日本へ渡海し佛殿の本尊は釋迦佛を安置し額は普光明殿高泉の
筆なり柱に聯あり今はなし四面孔極香吐九天日月千重宝閣撮盡里山河共に高泉の筆也禪堂は
選佛場額は昂非の筆也食堂の額五觀堂高泉の筆開山堂の額無盡燈一乗院
信敬法親王の筆堂内に高泉和尚の像を安置し又大悲閣には觀音を
安置して額ハ高泉の筆也南の門額天王山高泉の筆柱に聯を掲る高泉
の筆也四泉玄奔鉛佛國玉立巖天王高泉碑銘紫銅を以てまれを鑄臺座ハ亀の形
也して共に紫銅なり正徳元年五月廿六日攝政太政大臣從一位家熈公志るし給ふ記を
觀音巖千佛臺後山にあり共に當寺の金涌水右のうえ松の下にあり早といへども竭きる事なし
水輕くして茶の湯に可なり
伏見といへる龍々たる野径にしてとこ〳〵に民村あり秀吉公御在城の
ころハ大名屋鋪諸職工人貫人軒を並べ町に家に市を立て都へ貨
物を通じて交易をなしける
野山里澤田を云故人和歌に多し
山
新古　伏見山松のかげより見わたせバあくる田面に秋風ぞふく　後成
新後拾遺　夕暮ハ伏見の小田の稲葉風さそふ秋ハ秋ぞ悲しき　慈鎮
里
新古　夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹の伏見の里の雪の下折　有家
新勅　朝戸あけ見わたす伏見の里までもさびしさむ宇治の河波　後成
玉葉　夢路にかよふ伏見の里の浅ぢふにむねもさびしき秋の神風　式子内親王
野
新後古　をみなへし花の下紐うちとけてたれにか契る伏見のの露　藤原頼信
田井
夫木　呉竹の伏見の田井の田のわれよりも見るものぞなき　源俊頼
玉葉　おしむべき人の伏見にゆきて見るべきもの有りけり名におひて入神に衣をかけてもみぢ葉の露ぞ庭に虫なくなる　西行
城山
文禄三年秀吉公伏見城を築き大に其後慶長五年石田が逆乱に城火に焼て今は古址となり
山に桃花を数十株植て春へ大なる艶陽の艶を成し遊覧の輩多く
春色に醉酊し桃花のもとに宴を催す
これを伏見の桃林といふ
我宿のまはりの桃の花盛　くろ兆
城山やもえる火もなく桃の花　舞福
梅溪
城山の西五郎左町のもとより此地は梅花多く早春の花見の遊客を
蘭溪と清談居住記すこの所にあり

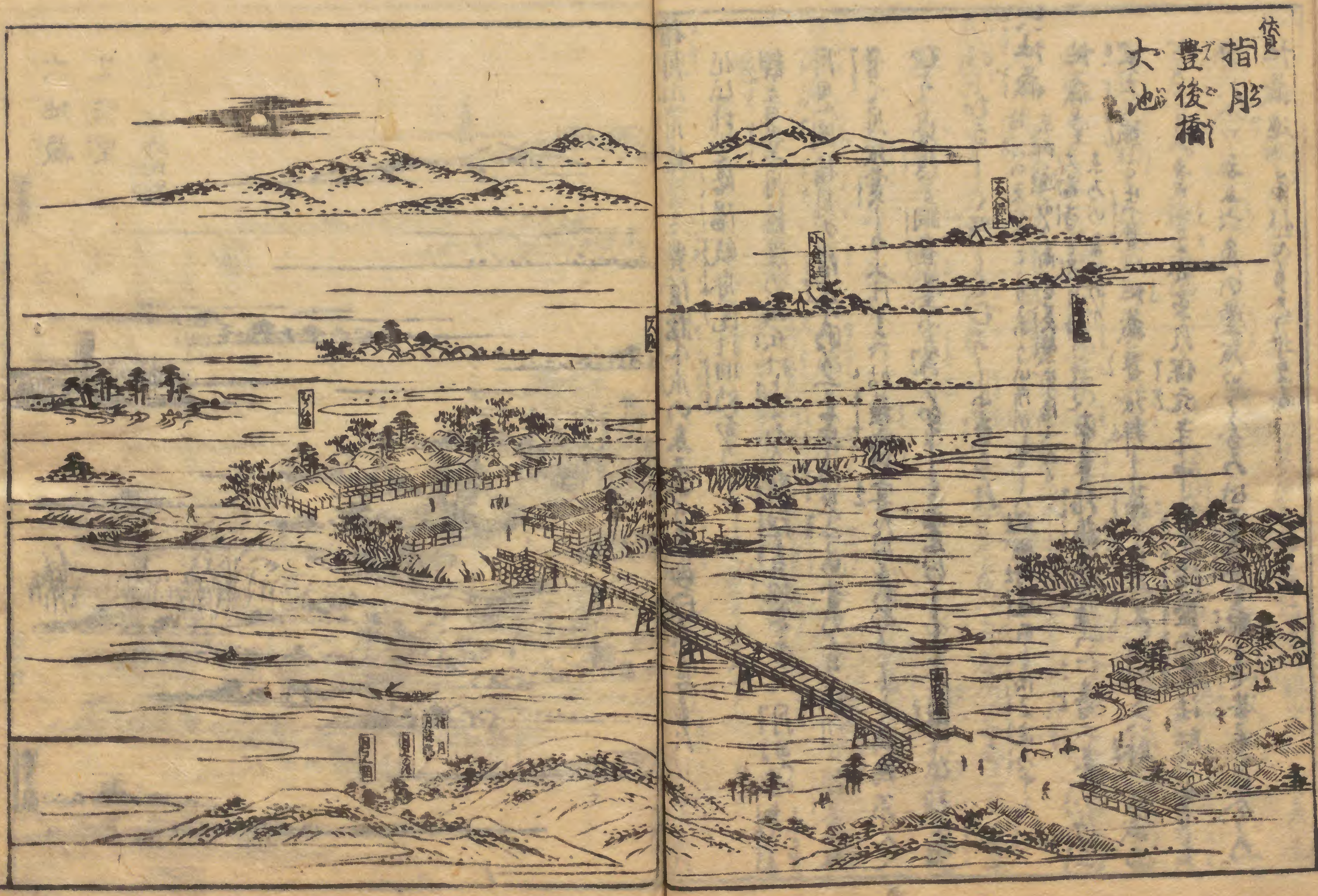

御香宮

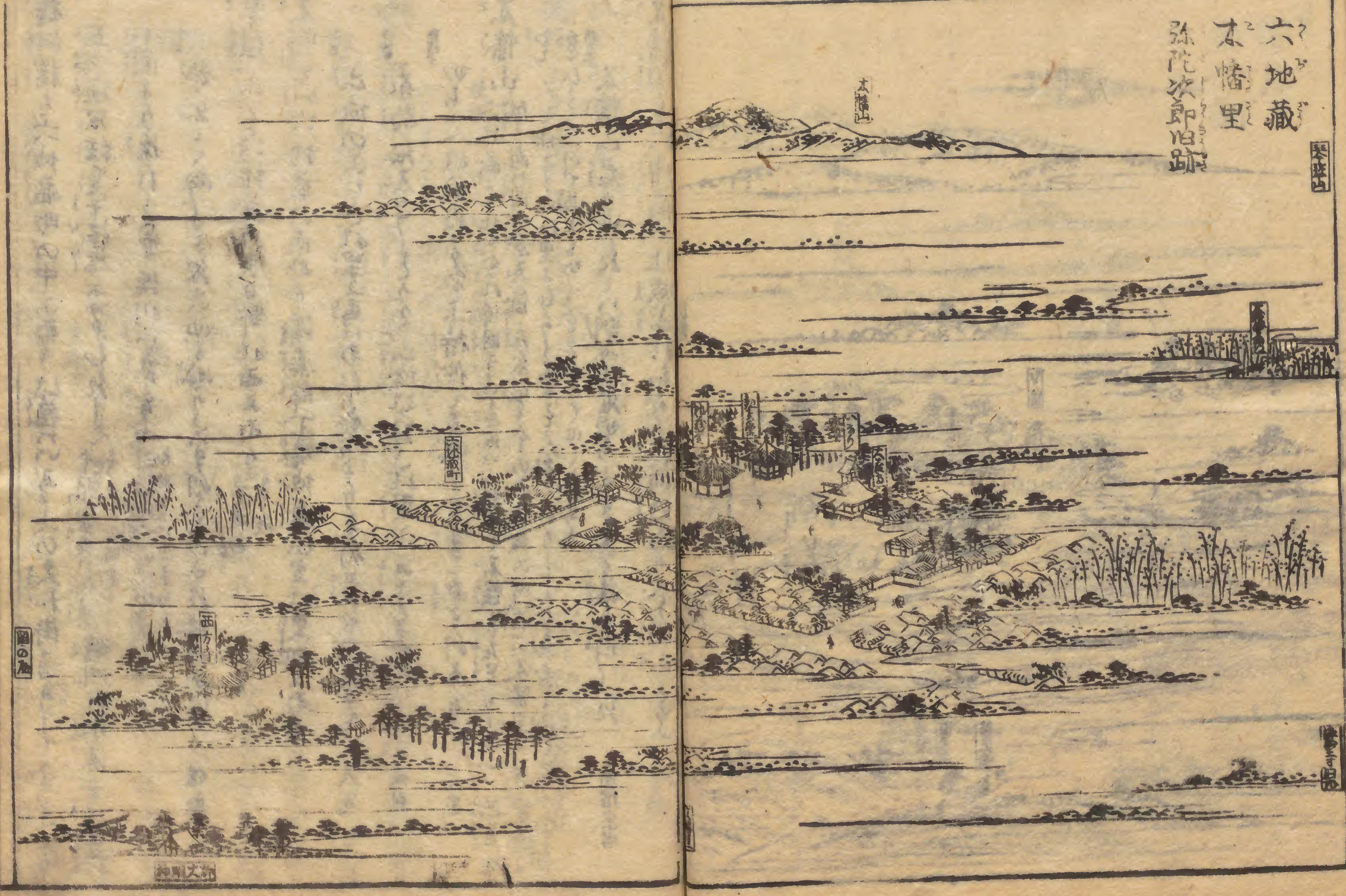


伏見船場
中書島

御香宮ハ城山の西にあり。本社ハ神功皇后にてまします。此地に御鎮坐ハいつの比にや年紀
歴詳ならず。文禄年中伏見の城をいとなみ給ふ時、此社を大亀谷の東
ふかくさの山に神崇ありしを、のち又此旧地に還坐ありし也。（其地を古御香宮といふ。今ハ当社の御旅所となれり）
九所堂ハ九坐の神をまつる。神輿も九基あり。御香水ハ鳥井の傍にあり。此
水ハむかし名高き霊石鳥居の内石の間にあり。清く冷しく霊験ある
所なり。世人めでたき名といふよし。拝殿南の門（伏見の城中にありし殿舎を移されしとなり。彫物等花美なり）
京橋のかゝりハ大坂よりの河瀬を引登る舟着にて、夜ハ舟盈の舟あつまる。都ふ
通ふ高瀬舟、宇治川くだる柴舟なども、まどりて、ひまもなく川辺の家々ハ旅客
をとゞむる家なり。年頃出して饗應するも此所の風儀なり。
巨椋の入江ハ豊後橋の南向ふより渺々たる水面なり。（東ハ小倉の中ニ大和街道あり）
夏ハ蓮花河骨生じて炎暑を避るの一興あり。冬ハ水鳥あつまり群れ漁猟をなせん。
ありて五十町の堤あり。
ほたる入江の月ハ殊に又光ハ至して螢も多くあり。
巨椋社ハやしろの入江の南小倉里の東にあり。古名明神とあり。此里の氏神なり。祭ハ九月十日（鳥羽）

指月山月橋院ハ豊後橋北爪の東にあり。開山ハ安寧弘法大師なり。
此地ハ洛陽般舟院の旧跡なり。
観音堂 月橋院の西丘の上にあり。聖観音安置。月見池（前よりまへにあり）
月見園 指月の後山にあり。宇治見たる絶景なり。此所に楼臺を
営て月を賞しけるハ姑蘇城の宴たけなハなりしし。鶴鴣飛んで
むかし秋悲の銅雀臺に舞のすそしも西去げにして今淋し。此地を月
おもむろしく照しても、むかしに変らんや
六地蔵 指月の東八町にあり。此所の辻ハ醍醐街道、西ハ伏見の街道に出る。京街道あり、南ハ宇治の街道へ出る。
地蔵堂 東西の角にあり。本尊地蔵菩薩ハ仁寿二年小野篁
冥土に趣き生身の地蔵尊を拝し、後一木を以て六躰の地蔵を彫
刻し当寺に安置す。保元年中に平清盛西光法師に命じて
都の入口毎に六角の堂を建て此尊像を配して安置す。今の
地蔵巡りこれなりとぞ


伏見
指月
豊後橋
大池
指月


六地蔵
木幡里
弥陀次郎旧跡
木幡山

撞河橋は六地蔵町の中にあり此橋はいにしへの大和街道にして金峯へ通ひ五ケ庄を経て宇治橋に至りしなりし 今は小倉堤の街道は秀吉公の時造る 撞川の水源は比叡山麓小関より流れて宇治川に落合ふ 上古は撞川といふ所にありて勧修寺川小栗栖川ともいふ

新勅 都出でて遠からぬ木幡山ほのぼのあけにすゝむ撞川の辺 俊成

琴瀬山は六地蔵の艮日野の西にあり 名義詳ならず

木幡里は六地蔵の南にあり瀬薬師不焼地蔵此里の東側にあり

拾遺 山城のこはたの里に馬はあれどかちよりぞ行く君を思へば 人丸

千載 家駒なまこよひとまれ山城のこはたの里にありとこたへよ 俊頼

新後撰 かちよ人は問ぬよるこそは待佗て木幡の里をこそ行けれ 定家

木幡山 六地蔵より北今は佛国寺の辺の人家をいふて木幡と称す古は限り南は岡の屋五箇庄を限る今の六地蔵の町も古の木幡里の故に人も和歌には詠てそ人 小八源義経 人多くありしより喜撰おもて詠

新後拾 かち人と詠むし此里よりむかへて馬ともいはで行くなり おひくる所で馬をもむかふともちにて行く心なり

木幡山君かゆくへは駒うち返し恋ひかり袖をぬらした 高階宗成

木幡関は六地蔵の北城山の麓にありし旧跡あり今関山といふ

拾遺 逢坂の関の関守は木幡の関に君と見た人のうち 家隆

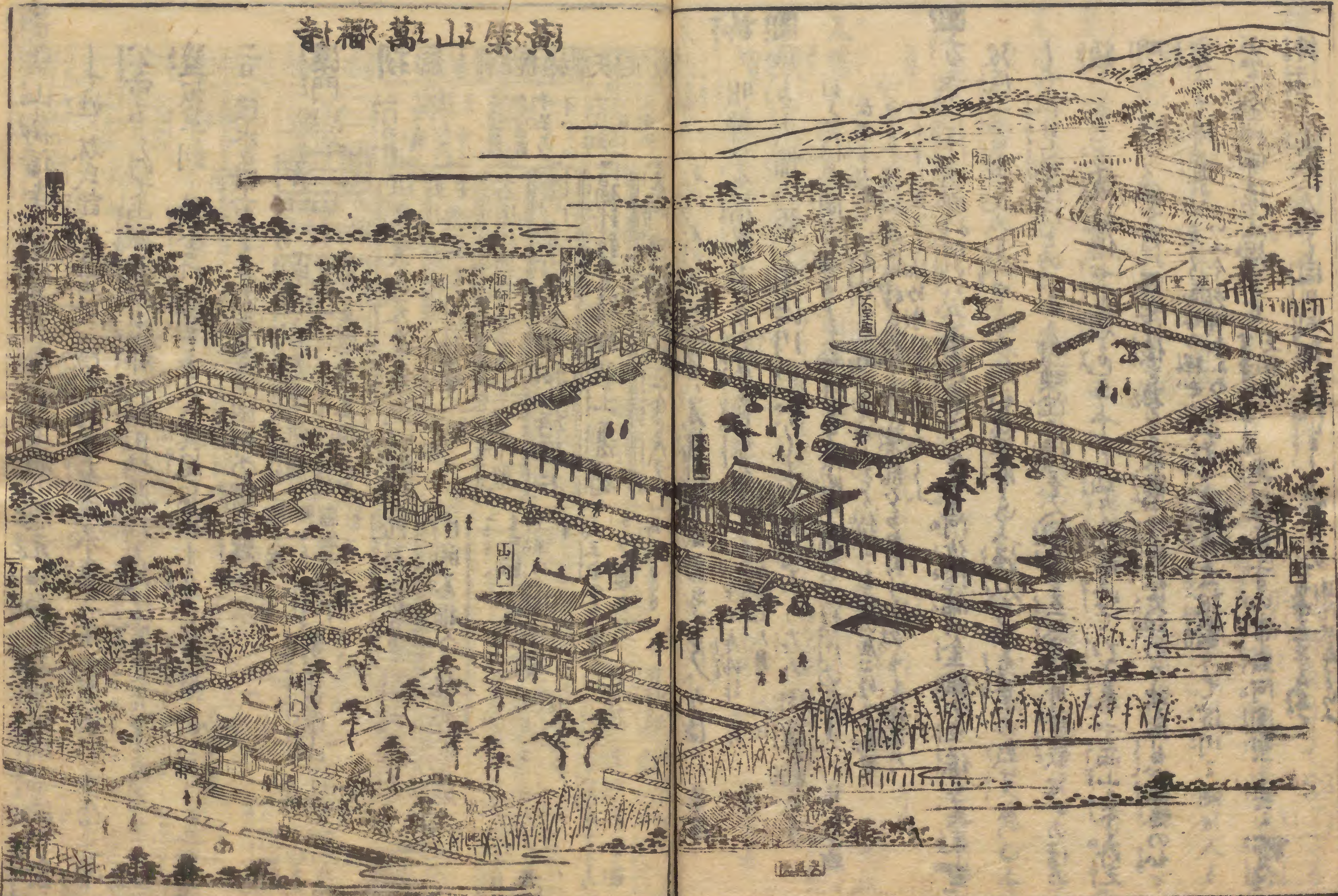
許波多明神は木幡里にあり天忍穂耳尊を祭る 此里の産沙神とぞ 例祭は九月十六日

岡屋は木幡の西宇治川の東にして民村あり古の街道筋なり

日ぐらしの岡の屋まへて浦人の袖しきかえたる撞川のほとり 読人不知

長明方丈記に曰若此の白波に身をよする時は岡の屋にゆきかふ舟をながめて満沙弥が風情をぬすみ桂の風葉を鳴す夕には潯陽の江を思ひやりて源都督のおこなひをならふ

西方寺は法然院次郎が旧跡にして五箇庄にあり本尊阿弥陀仏は金銅の立像也恵心の作也 板原は当国淀の東一口といふ所に悪次郎といふ悪人あり殺生を業とし常に念仏の僧を嫌ひて門戸に立つ悪次郎焼鉄をもつて念仏の僧の頬に当て邪見放逸なるの者あり頭陀の僧も怒る色なく浄土の教を施す其夜次郎夢に西山の光明寺に入て当堂内の釈迦の像をおがみけるに頬に焼鉄の火印あり次郎自ら懺悔の心を発して仏道に入り是より御鉢の釈迦とて今光明寺にあり 又ある夜霊夢を蒙りて淀川にて網を入るに紫金の仏像を得たり 当寺の本尊是なり 其後当寺の常照阿闍梨に出会ひ修行し遂に二人とも同日同刻に往生し侍りぬ 漁陀次郎といふ 法名を常念と号て


黄檗山萬福寺
山門

黄檗山萬福寺は五箇庄の南にあり開山隠元和尚は大明福州福清の人にして姓は林氏諱は隆琦字は隠元なり本朝承應三年に東渡し萬治二年公命によりて山城国宇治郡大和田の勝地を賜て寛文元年九月より伽藍を草創し精舎の經營多くは異風を摸し名て黄檗山と号す十三年四月二日後水尾上皇より大光普照国師の號を賜ふ

漢門 惣門をいふ

第一義 漢門の額なり高泉の筆

宗猷海道重恢廓
聖主賢臣悉仰る
漢門の聯なり高泉の筆

山門 楼門あり

黄檗山 山門二重楼閣の額なり隠元和尚の筆

萬福寺 山門の軒の額隠元の筆

祖席繁興天廣大
門庭顕赫日精華
山門外の聯なり木菴の筆

地闢千秋日月山川同慧聲
門開萬福人天龍象任登臨
山門内の聯なり隠元の筆

旃檀林 山門の後東向の額千呆の筆

大道没遮攔進歩直登兜率殿
法門無内外翻身投入旃檀林
東向の聯千呆の筆

天王殿 天王殿の額木菴の筆

福地鐘靈特感四王護国
慈門現瑞大啓三宝度人
即非の筆

天王殿 おそろしく東向に聯千呆の 布袋和尚の像を安す金色なり四天王の像脇に安す

威徳荘嚴 天王殿のうしろ東向にかくる額あり 即非の筆

首冠兜率感應三洲功第一
身據梵宮護持正法徳維磨
東向に聯あり千呆の筆

大雄寶殿 釈迦仏の坐像を安す

大雄寶殿 かくる額あり木菴の筆

尊徳 本堂の額木菴の筆

仰之弥高…
…
日堂の聯なり即非の筆

法堂 左右に額あり

獅子乳 法堂の額費隠の筆

棒喝交馳國師千古猶生
象龍圍繞靈山一會儼然
法堂の聯千呆の筆

紅…白月…
…小丹山没長生…
日堂の聯高泉の筆

威徳殿 常に安す

威徳殿 額

仁明昭日月
義徳鎮山河

山河正氣 威徳殿の額千呆の筆

祖師堂 達磨大師金色の像を安す

祖師堂 額本菴の筆

選佛場 坐禅堂

選佛場 額隠元の筆

禪堂 坐禅堂なり地蔵尊を安す

大願堂 額

伽藍堂 伽藍神の像を安す

伽藍堂 額木菴の筆

食堂 金剛の像を安す

禪悦堂 食堂の額なり木菴の筆

開山堂 隠元像を安す後水尾院勅額あり

通玄 開山堂の門の額隠元の筆

開山堂 額 同堂の額木菴の筆

壽藏

天開壽域…
地闢松風不老春

隠元碑銘 前に建つ

舎利殿 開山堂の後にあり後水尾院…

華嚴室釈迦佛を安ず 節竿旗大雄宝殿のまへにあり 多松閣當山の蓋所也 妙高峰天樂山とも云

五雲峰妙高峰の南なり

明星山三室戸寺より東北の南大鳳寺のむかしにあり本尊千手観音八円淨檀金の立像にして長八寸弐分也宇治山の東岩淵の庵より出現しれ西国十番の札所也光仁天皇の御本願にして智證大師の開基也中興ハ隆明法師

宇治山ハ三室戸山の南也喜撰法師此所に住けるとぞ

續拾
うち山のむかしの庵のあとハあれて名をのみかりのやどる　法眼玄盛

後撰
宇治山ハ紅葉をミしは秋の月のすむもおもしろきをあらはせ　ちゝぬね女

喜撰嶽ハ三室戸より一里ばかり巽にして槇川村の上にあり又岩屋ありてこれを喜撰洞といふ此絶頂より喜撰法師をかくふしきにて意式しのびけるといふ 熊野阿弥陀寺に喜撰が住家を三室のおくなりといへど長明が名利にハ三室戸のおく北条町にあり山中へ入て宇治山の喜撰か住けるあと家はるかなれど堂の礎なども残れり 此見えてこれをおもしろくかけり又古今の序に宇治山の僧きせんハことばかすかにしてはじめをはりたしかならずいはゞ秋の月をみるにあかつきの

都の巽宇治の里ハ茶の名産にして高貴の調進未曽の例ありて製法他境に殊なりし山吹ちり卯の花咲そむる比茶摘とて近里の老若の女白き手拭をいたゞき赤き前だれと腰に籠して茶園に入り聲おかしくうたふひなうた諷ひて興じあへりける陸羽の茶經にも書遺しけり

木がくれて
茶摘も
きくや
子規
はせを

宇治里　むかしハ菟道都より行程四里ありて宇治橋のほとりに宇治郡西なる人
郡といひし応神天皇第五の親王菟道稚郎子ハ帝位をゆづりあひたまひて
辞したまへる閑居しめし宇治宮と号し兄大鷦鷯皇子に譲り給ふ事三年を経て
父帝の勅なれバ位に即べしとのたまへどもあへて辞し給ふ事三年に及ぶ間
ありて遂に宇治宮にて薨じ給ふ兄の親王即位しのたまふ仁徳
天皇と申奉る又皇極天皇ハ大和国飛鳥宮より近江の比良宮へ行幸
ありし時宇治里に一夜泊らせたまひし尾花をかりて庵をつくらせ行宮とあふさ
しめたまふ此所宇治郡といひ伝ふる

万葉 [illegible]
秋の野の尾花かりふきやどれりし宇治のみやこのかりいほしおもほゆ　額田王

[illegible] お花咲けりのはさむれ秋風よもちの難を衣うつなり　匡房

新撰 さむしろに衣かたしきこよひもや衣うつらんうちの里人　雅経

名物 宇治の名産ハ氷魚鰻鰡鮨 一名宇治丸 圓提茶磨風炉 炭等なり
茶ハ本朝の極品にして天下に名高く顧渚山の甘露にも鳳凰山

の龍焙にも劣らず此茶むかし栂尾の明恵上人種を異国より
得たまひて栂山に栽置てありしを岩上茶と名付けりそれより宇治の
風土茶園に可なりとて栽初しなり

懸捨石ハ三室戸より宇治橋に至る所にあり　石面二方に観音の像を彫　一　椎が本此社ハ彼方
の町に鎮坐し山院の観音ハ此辺にあり浮舟宮も宇治の小波戸とよ
所にありて橋姫あのうらにし川の西にあり是ハ源氏宇治十帖にちなみて
いひしより名所となりたるをかの浮舟の君本玉のをとめてこれやまさに浮舟
うしろの木の下に捨られあるいろをそくらせたまひて薫大将推がなれ空
しき床なくむら中の君にいざなひてあまのおさなくてまつらせたるとかる
も皆此あたりに名蹟ありて物換り星うつりてむかしを慕ふ人多し

宇治川水源ハ琵琶湖にしてつれ治ふとながれ石山大津を経てこれ
めぐり巌に触れて宇治に落淀川に入　此間に鹿飛といふ所あり

拾遺 もののふのやそうち河のあじろ木にいさよふ波のゆくへしらずも　人丸

千載 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木　定頼

新古今 暮て行春の湊はしらねども霞におつる宇治の柴舟　寂蓮

山吹瀬を融大臣此地に別荘ありし時川岸に歎冬を多く栽給ひしより名づけしとぞ

続古今 花の色のをられぬ水にさす棹の雫も匂ふ宇治の河長　定家

新拾遺 ちりうかぶ歎冬の瀬の夕されば花にさほさす宇治の河長　西園寺相国

橘小嶋崎は宇治橋より川下弐町ばかりにあり 之

平家物語に曰 平等院の丑寅橘の小嶋が崎より武者二騎引かけ引かけ出来たり 一騎は梶原源太景季一騎は佐々木四郎高綱なり 人目には何とも見えざりけれども内々先に心をかけたりければ 梶原は佐々木に一段ばかりぞ進んだる 佐々木如何に梶原殿 此河は西国一の大河ぞや 腹帯ののびて見ゆるぞ 締め給へと云はれて 梶原さもあるらんとや思ひけん 手綱を馬のゆがみに捨て左右の鐙を踏透し腹帯を解てぞ締たりける

続古 今も又小嶋が崎の山吹や八十うぢ人のかざしなるらん　光俊

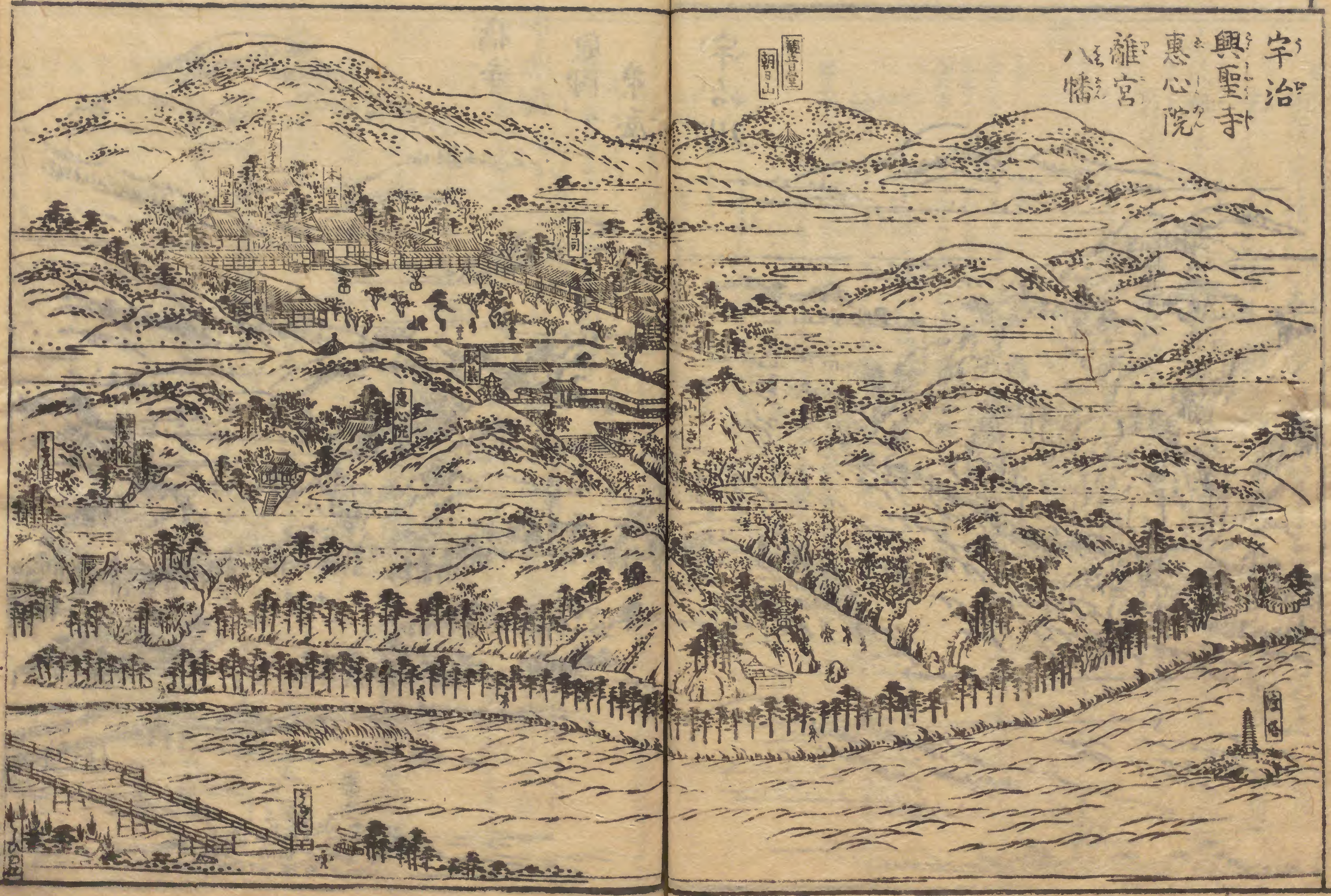
同 袖の香や花とあるらん橘の小嶋のよせし夜半のうき舟　太上天皇

源氏物語 兵部卿の宮宇治におはして浮舟の人をいとあはれと思して小舟にのりてさしわたり給ふ 橘の小嶋にさしとめて 兵部卿

年ふともかはらん物か橘の小嶋が崎にちぎる心は

女もめづらしき道のやうにおぼえて

橘の小嶋の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへしられぬ


宇治
興聖寺
恵心院
離宮
八幡
朝日山
本堂
恵心院

宇治橋ハ孝徳天皇の御宇大化二年に元興寺の道昭和尚此橋をかけ初し也
いにしへハ橋より西にあり明衡往来にハ東を望ハ
橋小島崎西を顧バ宇治の長橋云々

三間水 山城の名水なり槇田の橋下龍宮より漏出る水此所へ流来るといふ又一説
にを作し時網代の社壇の下より流出るを又秀吉公伏見御在城の時汲しめ其

通圓が茶屋 橋の東づめにあり此ふしへよりゆゑの人茶を調て茶店を

南ハ茶店に通圓が像あり むかしより宇治橋掛替のときハ
此家も公儀より御修造ありしと

橋寺ハ通圓が西つゞきにあり常光寺放生院と号す本尊地蔵菩薩開基ハ
道昭和尚也其後興聖菩薩に至て橋供養しぬ也

離宮八幡宮ハ橋寺の南にある所の神也上の社ハ應神天皇仁徳天皇
下の社ハ菟道の稚郎子なる 又平等院の鎮守なり宇治郷の産土神也
神輿之基 例祭ハ五月八日

杦社ハ當社の北にあり離宮八幡社なり離宮と号るものハ此地に宇治天皇
當社の祚ハ武州卿平忠文が霊を祭るといふ則此地忠文が別荘なりし其一説ハ
作宇都宮平三年三月平将門征伐にくだり 卿貞盛忠文等将軍として
ゆくにあらず将門を追討せしにより 勅賞のさたありしに小野宮大臣清慎公これハ
さらに将門をうたれ九條右大臣實頼公賞ハあるべしといひしかど
りしは賞のうちにいたらず とて忠文かなふべくもあらねば忠文恨み
其後怨霊となりて忠文が家に祟りけるが八つの爪を

甲まで通りて血を注ぎ断食して死たり其まゝ悪霊となりさまざま祟をなし
けれバ小野の家を絶さんとて此霊を宥んとて神といはひて宇治に
離宮明神と崇めけり 後冷泉院の御宇
治暦三年十月七日正一位をさづけらる

朝日山 離宮の後山なりといふ 菟道尊陵 朝日観音 此山頂にあり

風 朝日山のどけき春のけしきより八十うぢ人もわかな摘らし　為家

日 あさ日山まつ陰くらき暁に霧わけうちわたる山本の道　資明

朝日山恵心院ハ離宮の南にあり 真言宗にて開基ハ恵心僧都也 本尊大日如来ハ弘法大師の作 薬師堂の本像も同作也 恵心僧都七十六才の像堂内に安置 本堂の額 恵心院 持明院基時卿の筆 開基源信僧都ハ和州葛木郡の人也 姓ハ清原氏 叡山慈恵法師に従ひて顕密の教をよくきはめ一乗要訣 往生要集 阿弥陀経略記 大乗対倶舎抄 因明相違略注を著し恵心院の僧都といふ 大唐南湖知礼法師に問書を送られしに 大に感歎し答釈を作りて送りける 寛仁元年六月十日従容として寂す 臨終のとき衆ハ疑ひを問へとて定を起ちて其後僧坊

さけ上足慶祐法師是ハ故とさめて其ハ法を誦しつゝげに答ふ 年七十六の時天楽空に聞え奇香山にみちぬ 山中の草木ことごとく西になびきしとなり 趙宋皇帝僧都の道誉を聞て塔廟を建影像を画かしめ日々に帰依したまへり

新古今
我だにもまづ極楽にむまれなばしるもしらぬも皆むかへてん　僧都源信

仏徳山興聖禅寺ハ恵心院の南に隣る 曹洞宗にして開基ハ道元和尚也 仏殿にハ釈迦仏を安置し 額 興聖宝林禅寺 普門蓮院尊純法親王の筆也 當寺ハいにしへ深艸里にあり 今の極楽寺の南 欣浄寺の境内なるの旧地也 正保年中万安和尚中興して諸堂を淀城主永井尚政の建立なり 川岸より門まで琴坂といふ 左右に桜山吹をうゑて山腹を透迤し 朝日山を庭中にとり白槙を植て臥虎と名付 雄踞嘆にさかれて宇治の川瀬の音を聴て龍の室に入床を敲て虎の堂にめぐるを此禅刹のたとへとすべし

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　はせを

観流亭 岸のうへ興聖禅院にあり
亀石 観流亭の汀にあり 形亀に似たり
中宿芝 恵心院下岸のかたはらにあり

家集
鳥羽院の
御前会に
江上蛍多
といふ事を
よみ侍る
いさやそれ
蛍の数は
しらねども
玉江の　芦の
見えぬ葉ぞなき
源三位頼政

槇嶋は宇治橋より乾八町ばかりにあり　宇治橋より豊後橋まで凡五十町の堤あり　名を槇堤といふ　此間に槇嶋目川上嶋下嶋
等の民村あり又上嶋より巣梁への舟わたしあり是をまきのしまの渡といふ

金葉
宇治河の川瀬もみえぬ夕霧に槇の嶋人舟よばふなり　基光

新勅撰
河風の夜寒の衣うちわびて月にぞあかん槇の嶋人　為道

橋姫社は宇治橋の西詰にあり　今礎存せり　くだりに二社あり一社は此水の源流を

古今
さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらん宇治の橋姫　読人しらず

此歌の評説をとりて或は神をまつる袖中抄に住吉大明神橋姫の神にかよひ給ふ
歌なりといへり又清輔の説にいはく山の神の橋の神の姫とし佐保姫竜
田姫などいふ旧妻なる橋姫にかよひ給ふ一条禅閤の御説には離宮の神夜
毎に通ひたまひて暁毎におびたゞしく波の音のあるをさしていふ玄恵法印の説なり
嵯峨天皇の御時にある女貴船の社に七夜丑の時参りして
河の波に髪をひたし悪鬼と化せしを橋姫といふ宗祇の説にもとおなじ
かくしてん妻ありしも我をまつらんとて姫は妻なり
ようそへてかくちらして儀すべし源氏物語に橋姫の巻あり此しるべ
あり此外にも其説あり定家卿も宜ひたるぞ又道
遥院殿の御説も清輔宗祇の説に同じ佐保姫竜田姫橋姫共に一姫
とりて源氏口授のあらましを道の師にいりそめし

新古
あじろ木にいざよふ浪の音ふけてひとりや寝らん宇治の橋姫　慈円

新千
橋姫のかたしき衣ゆきのまに紅葉ぞさえてちる河波　後宇多院

浮舟渡は橋より弐町ばかり川上なり　弘安九年興正菩薩橋供養のとき高さ五丈十三重の石塔婆を建つ近年洪水に流れ

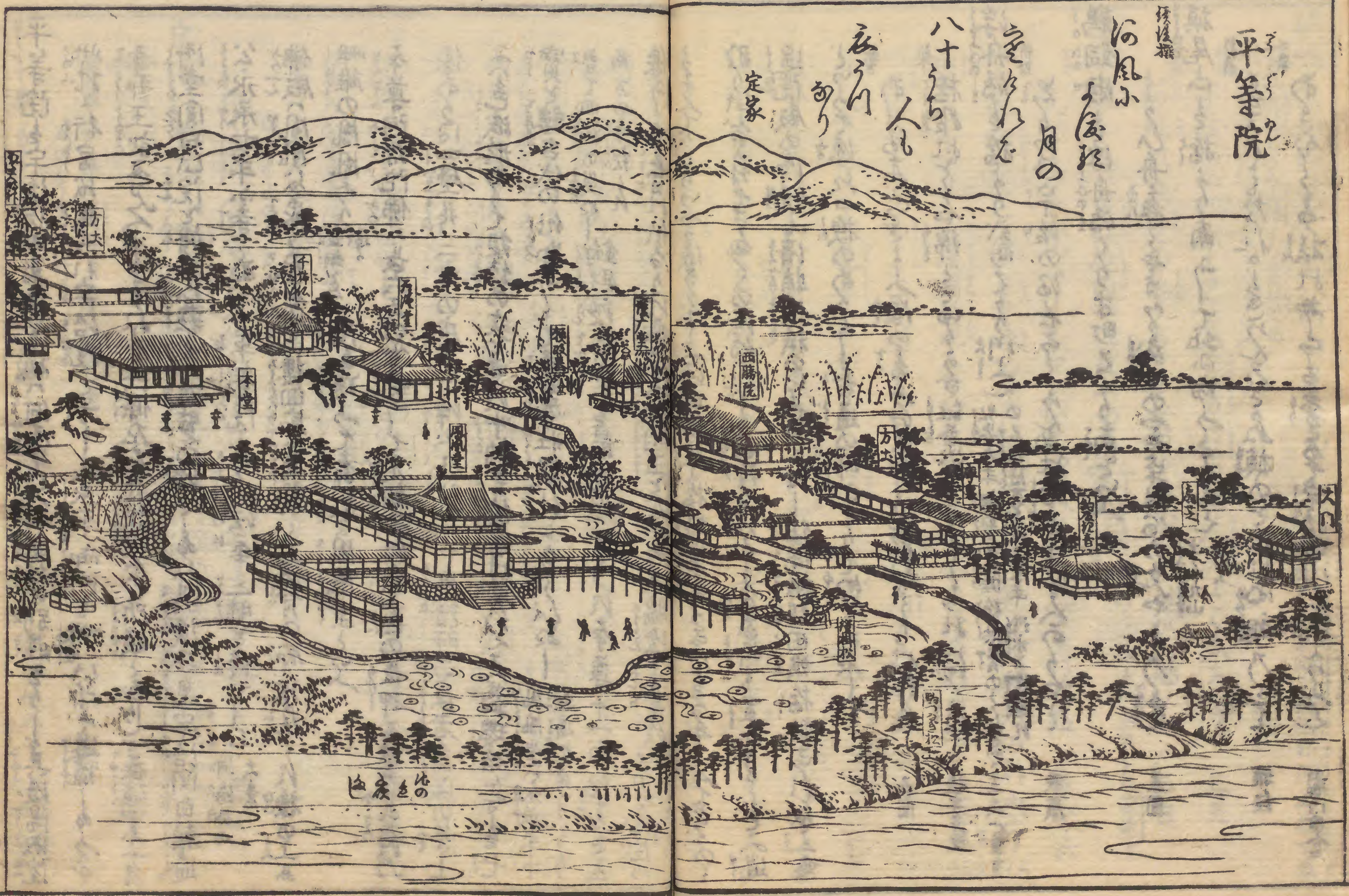
新拾
名にしおふ宇治の河長よしもがな浮舟渡のはるかなるかな　頼康

鵜飼瀬は浮舟渡より半町ばかり南なり
うかひ舟あはれとぞ見る武士の八十宇治川の夕やみの空　慈円

槇尾山は橋より南にして北に向へる山なり　土人丸山といふ

新後撰
ましばつむ槇の尾山の朝霧にまきれぬ槇の尾山の朝霧のそら　雅経

玉葉
あさぼらけ槇の尾山の宇治の川をちかた人のたかぬなり　土御門内大臣


平等院
續後撰
定家
本堂
方丈
大門

平等院は宇治橋の南にあり初は河原左大臣融公の別荘なりしが其後陽成院
此地に行宮を建られ宇治院と号し又朱雀院承平御門も此所にて遊猟しおハしまし
季部王記にみへたりそれより六條左大臣雅信公の所領となりしが長徳四年十月
御堂関白此院を得て山荘とし遊覧の地としたまひ其後子息宇治関白頼通
公永承七年に寺となし平等院と号し法華三昧を修せしむ 河海抄の大意
佛殿は鳳凰の象なり左右の高楼回廊を両翼とし後背の廊を尾とし棟の上に
雌雄の鳳凰あり 金銅を以て造る 風に随つて舞故に鳳凰堂といふ
本尊阿弥陀佛は長一丈六尺の坐像にして定朝の作堂内の長押に廿五菩薩乃
像あり又四壁并三方の唐戸に浄土九品の相を画繪師の長者為成の筆上
品ハ色紙形ありて観経の文を書る中納言俊房卿の筆なり天蓋瓔珞等まで七
宝を鏤古代の佛物にして美麗荘厳仏土のごとくなりし 鳳凰堂ハ永承年中頼通公建立なり
曽て回禄の災なし 釣殿観音堂を最勝院と号る本尊十一面観音を立
南方の奇観なり
像にして長五尺作なり又地蔵尊不動明王を左右にして脇壇に安置す 此所宇治院の釣殿の跡也

て扇を敷て自害せし所なり 扇芝は源三位頼政治承四年五月廿六日此所において自
害の所なり 委くは平家にあり 駒繫松 頼政馬をつなぎし所なり 鐙懸松 おなじく鐙をかけし所なり 阿字池
鳳凰堂のまへにあり 鐘楼 其鐘は龍宮より上りしといふ 園城寺の阿弥陀水
恵心僧都の作りたまへ 本朝三鐘の其一なり
経楼の下にあり 法華水 浄家方丈の前楼門の辺
六字の名号の石碑を建つ 竹林の内にあり 今のあり様の小なるは焼失の後廃せしを遺れ
抑當院は天台浄土の二流ありて台家は三井寺に属し寺務を圓満
院御門主これを兼浄家は宇治関白の御菩提所にして心誉上人より世々浄土
宗なり 當院を守る 方丈に頼政の肖像及び画像あり
全集 うぢなる平等院の寺にまうでたりけるに住持の
ひとりのものとうちあやまりて よみける
宇治川の底のしづみてあらはれて沈めし心をあらはせり 忠快法師
宇治別業 宇治関白頼通公の第宅を平等院のうしろ西の方四町ばかり
なり 今所の字として地蔵 岩橋 御園 御倉町など云所あり
名所
帰去来 宇治に住わびぬと聞えしほどに 人のもとへ言の葉をなんやりける
里をばかく山わけて宮古の人にまみへずなん 宇治前関白太政大臣

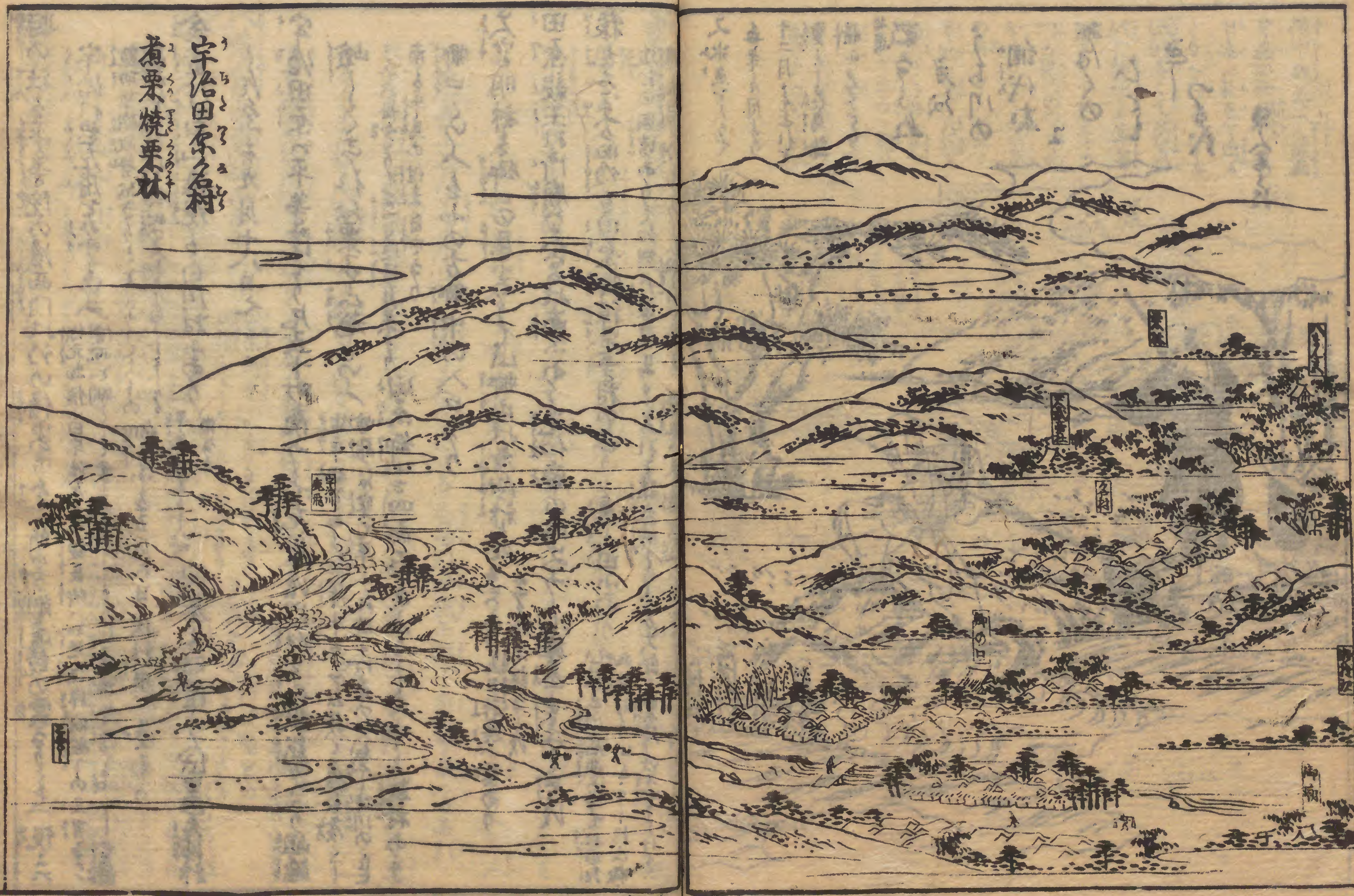
侍中群要に山城国
宇治の御網代より
日毎に氷魚を進す
とあれバ今も宇治
氏能飼うて孫生の
ひへ鮎汲とて平等
院の十町ばかり
川上槇川のつゞきの
やくりにて今の巌
の肩によりて尾を
早瀬を走る鮎を
汲上て興に乗じ
しれ李白の詩に
鵜戸鯉を慕ひ
しを此ゆへにこゝを
撰んでとる也

又氷魚をとるとて
毎年九月より
十二月まで是を
貢し花鳥餘
情にみえたり

拾遺

数ならぬ
身をうぢ川の
網代木に
おほくのひをも
すぐしつるかな
読人しらず

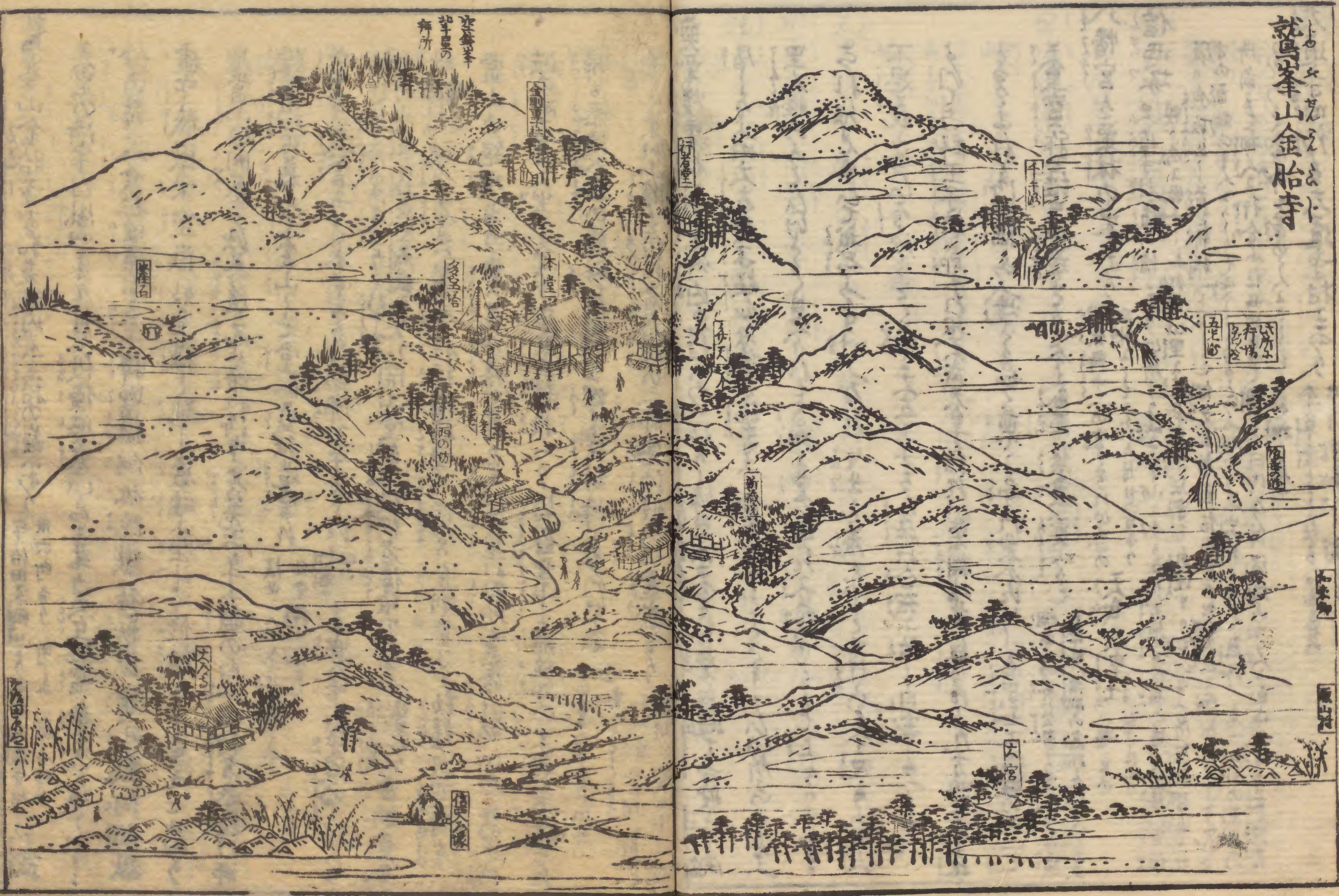
宇治田原名村
煮栗焼栗林



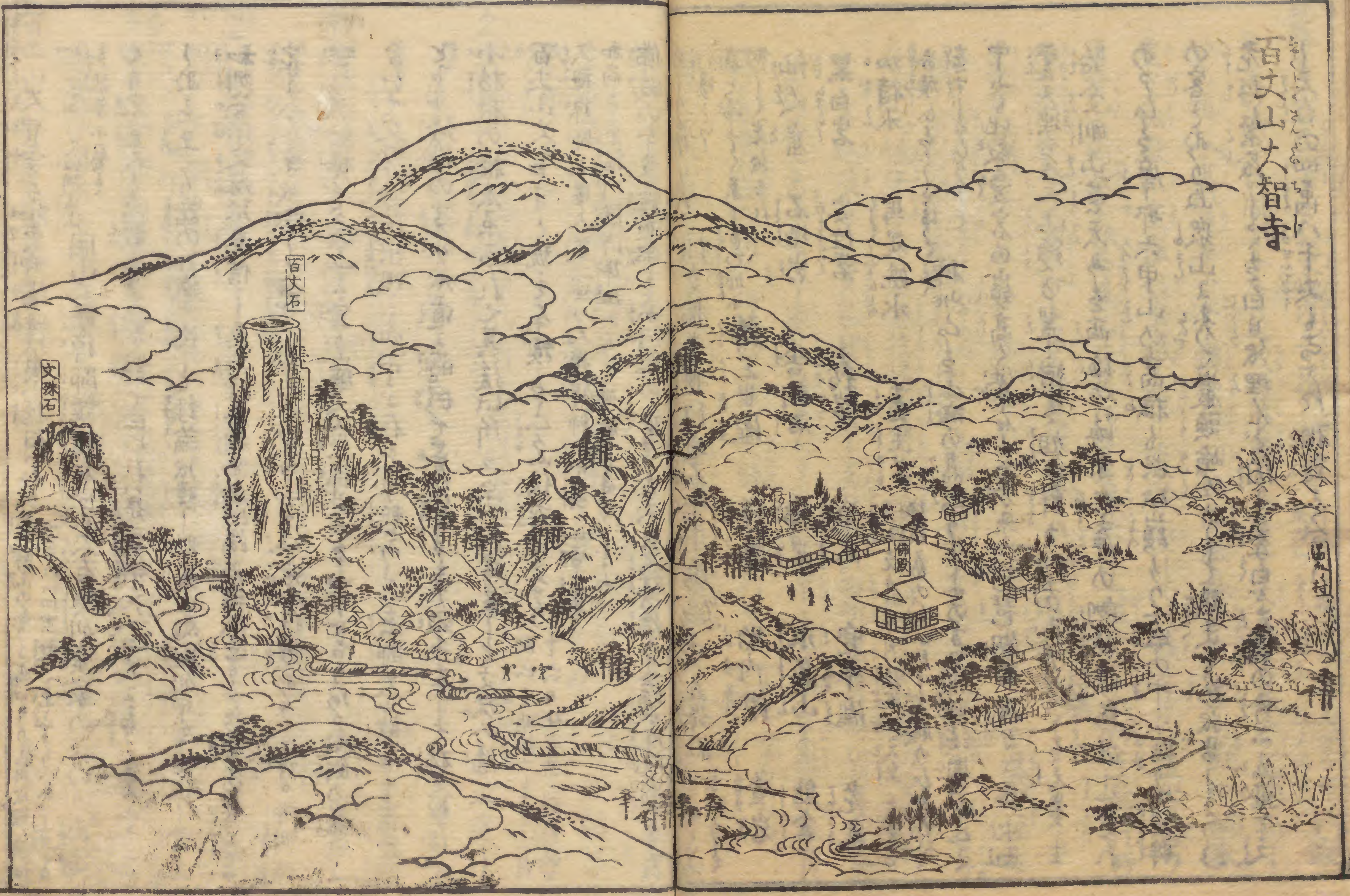
縣の社は平等院の後西門にあり祭る所は弓削道鏡の霊なりとぞ一説には
宇治の悪左府をまつるといふ（保元物語に曰宇治左大臣頼長卿は知足院禅閤殿下の三男なり 信西を師として常に学窓にあり仁義禮智信を正しく賞罰勲功を掬政勢ありしかば上下の諸人おそれをなしければ時の人悪左府と申しける）例祭は五月五日夜神輿一基あり
金色院白山権現は白川村にあり（平等院より十八町南なり）開基は明澄上人此里に寓居す
例祭は九月十八日也
宇治田原は平等院より凡五十町南にして左は宇治川右は山嶽巍々たり嶮路
嶮しくされば栗子山越といふ（近年此道をあらためて岸にそふて道を広くし嶮岨を穿て平地とす故に往来の人軽捷なり川の辺）または舟をもつて薪を運送す果より田原郷までは四面みな山にして中に数村あり
南には牛馬の往来自由なり
郷口といふは北の方郷中の入口なり
大宮明神は郷口の艮にあり此郷内の産沙神なり（祭九月九日神輿一基あり 祭る所未詳なり）
田原親王の御廟は大宮の南にあり光仁帝の御父にして施基皇子と号し
猿丸太夫の旧跡は田原郷禅定寺村の奥山田にあり（此地は山洞屈曲して比那なり山城近江の国境ありて江州戸塚村へ出るこれを猿丸峠といふ 方丈記に粟津の原をうけて蝉丸翁が跡をとふらひ田上川をわたりて猿丸太夫が墓をたづぬと見えしは此所といふ）

煎栗焼栗林は田原郷内名村にあり むかし浄見原天皇は世を避て吉野に入給ふ時此所に
居し給ふ時に大友皇子疑ひを懐く讒者あつて天皇をうしなひまゐらせんとす此所にて
里人怪みてうやまひけるに焼たる栗と煎たる栗を奉る天皇是を
とらせ給ひて我もし天下を保つべくんば此栗必ず生出て繁茂すべしとて地に埋たまふ里人
不思議におもひ守護しけるに芽を出し遂に大友皇子は山崎の合戦に敗れ自害し給ひぬ
よつて吉野皇子位に即給ひて天武天皇と称し此栗樹次第に繁茂し凡方四町の栗林
となりて此を御栗栖といふ焼たるが如く煎たるが如し此栗今に至りて当田の七不思議の其一なり
天皇宝祚を継せ給ひて今に毎歳禁裏へ貢上す（調進の時節は公卿より宮仕の人来り守護す 不浄の者乱入禁制の高札を林の入口に立てあり）
八幡宮は栗林の東にあり（田原郷中一の宮と号し此郷の氏神にして祭は九月廿六日なり）天武天皇社（八幡宮のかたはらにあり）
信西塚（大道寺村道の傍にあり此所より鷲峯山に至る道なり 少納言信西入道は右衛門督信頼が為に戦ひに敗れ此地に遁れ此里に来りて土中に穴を穿ち自埋まりて居たりしを源氏の武者所尋出し首を斬都へ上りしと 保元物語に曰 信西あなの中に水に面をひたしてうめきけるをさがし出し首を斬す 信西が首の廻りに竹の筒ありて息を通せり 相人に相をみせけるに相人の曰御身は諸道の達人なれども寿命をたもつべからずとて相しける）
大道寺旧跡は大道寺村にあり（今草堂として観音を安置せり 此所鷲峯山の麓なり）

鷲峯山金胎寺（じゆぶせんこんたいじ）



鷲峯山金胎寺は和束郷内原山村の巓にあり 宇治田原郷口より一里半丈道寺村より卅六町あり一町毎に標石あり 文武
天皇の御宇白鳳四年九月に役優婆塞はじめて此山に来り天竺の霊鷲山に似たりとて開基し
八ツの嶺は八葉の蓮華に表し釈迦嶽 阿弥陀嶽 弥勒嶽 宝生嶽 阿閦嶽
虚空蔵嶽 不空嶽 妓楽嶽と号し巌頭に坐して修法せらるゝ事五七日なり
是当山の開基なり其後元正帝の御宇 養老六年に越の白山の行者泰澄法師
役行者を慕ふて登山し七堂伽藍を造営す 後世に及んで荒廃し今仏堂纔に存せり
宗旨は真言にして本堂にゐる弥勒仏を本尊とす 行基作 行基の多宝塔に愛染明王役安倚る前鬼後鬼あり
又た 伏見院の御建立にして行宮の御 行宮の旧跡虚空蔵嶽にあり 開山堂 自作役行者像を安ず 金剛童子
社 当山の鎮守 鎮守石は日本金柱福満権現 八幡宮 金剛童子を勧請す 空鉢峯 八
当山の絶頂なり 宝篋印塔を建る 是北斗星を祭る所 泰澄法師此所に於て修
法の時石上に坐しながら虚空に鉢を投らす 自ら鉢雲中に飛旋して米穀を入て来れり
帰る 泰澄入寂の後鉢を此地に埋て空鉢峯と名けし也 世の変ある時は此所鳴動すといひつたふ
当山東北山腹は役行者泰澄の二師密法修行の霊嶽なり 和州金峯山に準じて登山の輩此所を巡る
行場といふ 北多輪 東覗 行道石 千手瀧 一の瀧をいふ 五光瀧 二の瀧をいふ 巌と添ひて落る所に旭に映じて光をはなつ 降三世瀧 鐘懸 胎内潜 登岩
仙人窟 石塔岩 舎利石 仏岩 水晶山 熊倉
黒白岩 安住岩 天狗岩 亀石 兜率瀧 老瀧
加持水 馬足洗水 蓮生岩 元弘元年九月後醍醐天皇笠置の城没落の御時此所まで遁のびさせ給ひし
当嶺ひろくして眺望すれば 摂州山城の高山にして北の方は帝畿遶圍れり 東く
中にも比叡愛宕の山嶺高く聳え右手の方にある琵琶湖の漫々たる水面
雲に連なりて三上鏡の翠巒を旭に鮮なり弓手のかたは志貴生
駒金剛山葛城天にそびえ西海の海原兵庫の洲膝淡路島も見れ
あらはに摩耶六甲山の高根も是此嶺より一眼の中に遮りて雙眸
の客となりぬ衆山に秀て巌頭嶮々として樵夫も稀なる所なり
老杉繁茂して白日を埋み四方を閉し李白が天姥の吟に五嶽を走
し天台の四萬八千丈もさらんと相対すべし


百丈山大智寺
百丈石
文殊石
佛殿

百丈山大智寺は和束郷湯舟村の奥小杉村にあり 鷲峰山の西にして郷口より山田坂を経て鷲峰越に至れは四里余なり山よりは和束の里を出て

縁起曰 開山大観禅師諱は理有字は大有奥州金家のゆかりより出生 幼にして江州山上永源寺に属す

ちり不言ふして六載にして始て語て曰われは是良辨之父母大に寿を養ふに生る

となるを又かり諸の知識に謁して経論を暁し壮年の時近江甲賀に住し常に

和州安倍文殊を尊信し参詣の志願を企つ湯舟村を過るとき柚木の翁君に

家に入て茶を喫して憩ふ此あるじの曰当山に山水の佳境ありと告る師則稍

實に沐を携て此の山に登り巌上に坐禅する事一千日ばかりなり側の巌に一夜

さけて文殊菩薩出現し空中に在ること暫にして去る師大に歓喜して山石頭

を下り残桃の実を以て道に蒔て其はいを数千本として林となす今

小杉村の柚木是これ也其後此所に宇を建立して文殊の像を安置し

百丈山大智寺と號す本願は山名伯耆守なり 開山は明徳二年十二月十六日化す四十歳 勅諡を

大観禅師と賜ふ其二世は大撥禅師に中興 如雪文巌和尚また東福門院の御帰依ありて佛殿再建したまふ

佛殿の本尊釈迦佛は安阿弥の作なり方丈には文殊の像あり又後水尾院の御宸翰を安置

坐禅石 方丈のうしろ十町餘にあり高さ三十間横幅二十間頂上の平方十二尺あり此所に窟ある所也大観禅師千日坐禅し給ふ所ぞ

文殊岩 岩面劈けあれて文殊大師あらはれ給ふ所なり 布引石 岩面白色にして布を引し如くなり 大鼓岩 形大鼓に似たるゆへ

久世鷺坂 宇治田原の西之此所をいふ久世の大和街道にして久世村にあり 廣野新田の南にあり

續古今

白鳥は鷺坂山の松かけにやとりてゆかむ夜も更ゆくを　人麿

家集 鷺坂よみける

今日ぞみる鷺坂山の白つゝじいくぞ佐保姫染めし色なる　源三位頼政

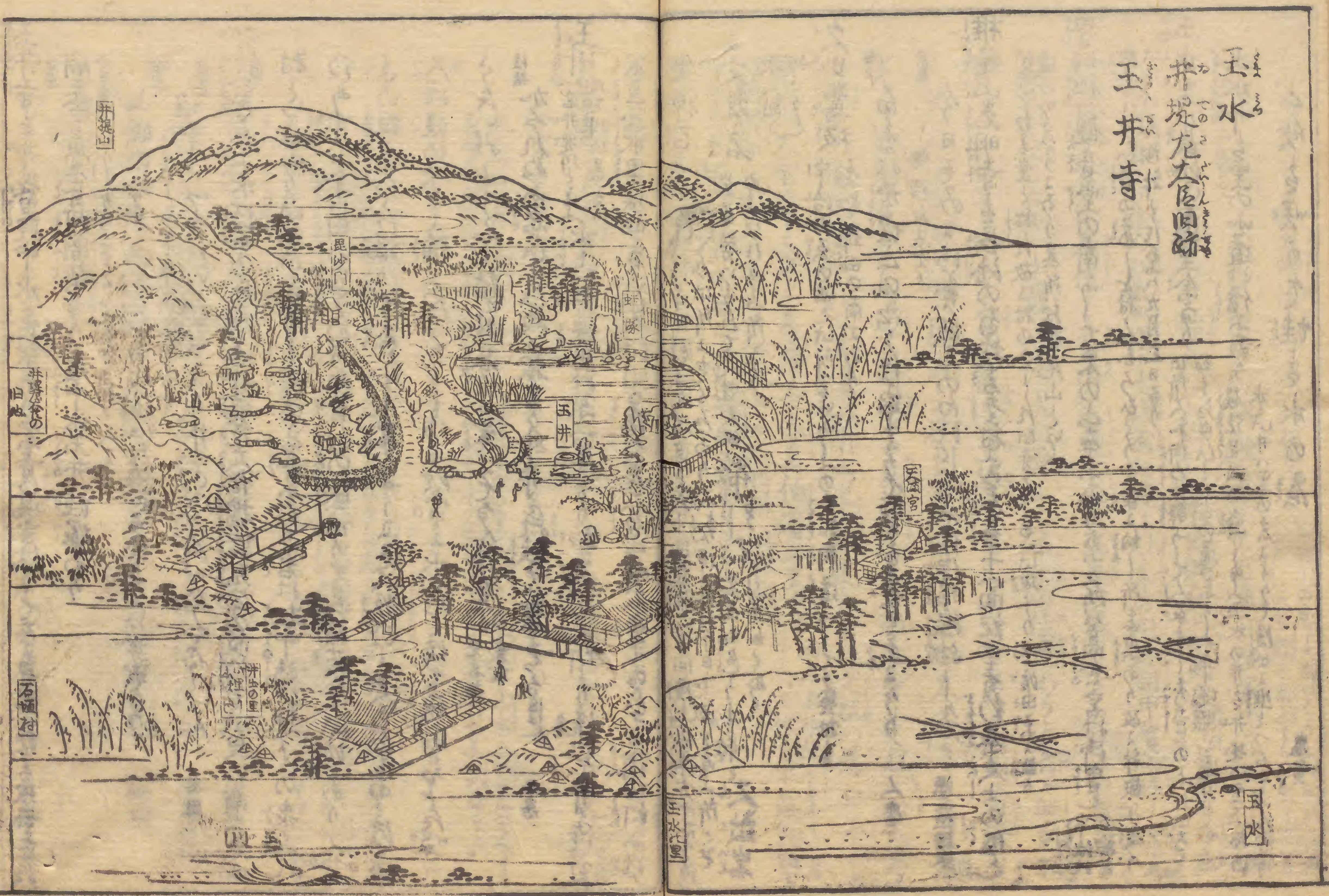
椎尾山光明寺は長池の東観音寺村にあり本尊十一面観世音行基大士の作也 此寺を観音堂と称す故に村の名とした此寺より宇治田原に越る道のかたはらにあり其所を椎尾山といふ

曽束社は観音堂の南にして東の山中にあり祭る所は高倉宮以仁御曽之 宇治代合戦に敗北し此曽束の辺へ落給ひ村人かくして家に納し所也崇りあり故に拝殿を造り 此所の産神とす祭は九月三日なり

玉水里は長池の南一里余なり 此所大和街道の驛にして人家多し 秀吉公の時此所の道を通りて井堤の里を通りしよし

玉水井は里の小道の側にあり 橘諸兄公の愛し給ふ玉水の井なり 井堤の里の玉水は此井の名によりて後世に準へつくるといふ

山吹を咲てそ蛙する水の底　鬼貫



玉水
井堤左大臣旧跡
玉井寺
井堤山
毘沙門
蛙塚
玉井
井堤左大臣の旧跡
井出の里
石垣村
玉水の里
玉水

玉井寺は井堤里の中にあり宗旨は真言律にて本尊は聖観音なり安置なり
開基は覚音阿闍梨なり庭中に玉井蛙塚あり

伊勢物語
むかし男ちぎれることあやまれる人に
山城のゐでの玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

新古今
延喜十三年亭子院歌合
足曳の山ぶきの花ちりにけり井手のかはづは今やなくらん　興風

井堤里は玉水の宿の西のかた井堤左大臣橘諸兄公の旧跡は此里の南に石垣をもつてありし所の跡の上村の山手にあり岩根松中清水はむかしの泉なれば今は田の字となれり昔紅の藤ありて其残苗今此地にありて井手の蛙をまろく隈りて色はおしく黒きやうなる形はいと大きにもあらず世の常の蛙のやうに踊りありくこともなし常に水に住みて夜更るほどに鳴つれさるはいみじう心も清て物哀なる声にぞ侍りける　無名抄　意取

後撰
かくれぬに忍びわびぬる我身かな井手のかはづとなりやしなまし　忠房

玉川 一名井堤川といふ水上は井堤里の東二里ばかり和束といふ所より流れて井手の里を経て玉水里の西へ行て木津川に落入る左右の岸に山吹生ひしげりて玉川の汀に深
六玉川の其一なり

く植させ給ひけるとかや今其所々花の頃は水上なれば大きにして幾千ともなく咲まじりて花の盛には黄金の堤をなせり他所にはまれなり佳景也　無名抄　意取

古今
山吹はあやなくさきそ花見んとうゑけん君がこよひこなくに

延玉抄曰此寺は左大臣橘諸兄公の旧跡にて山吹の井手の寺光明寺を建立して山水を引入たり其時高向の迦留大臣山吹を植てかんと給ふ七本の内今井堤寺の玉水其跡也云々

同
かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

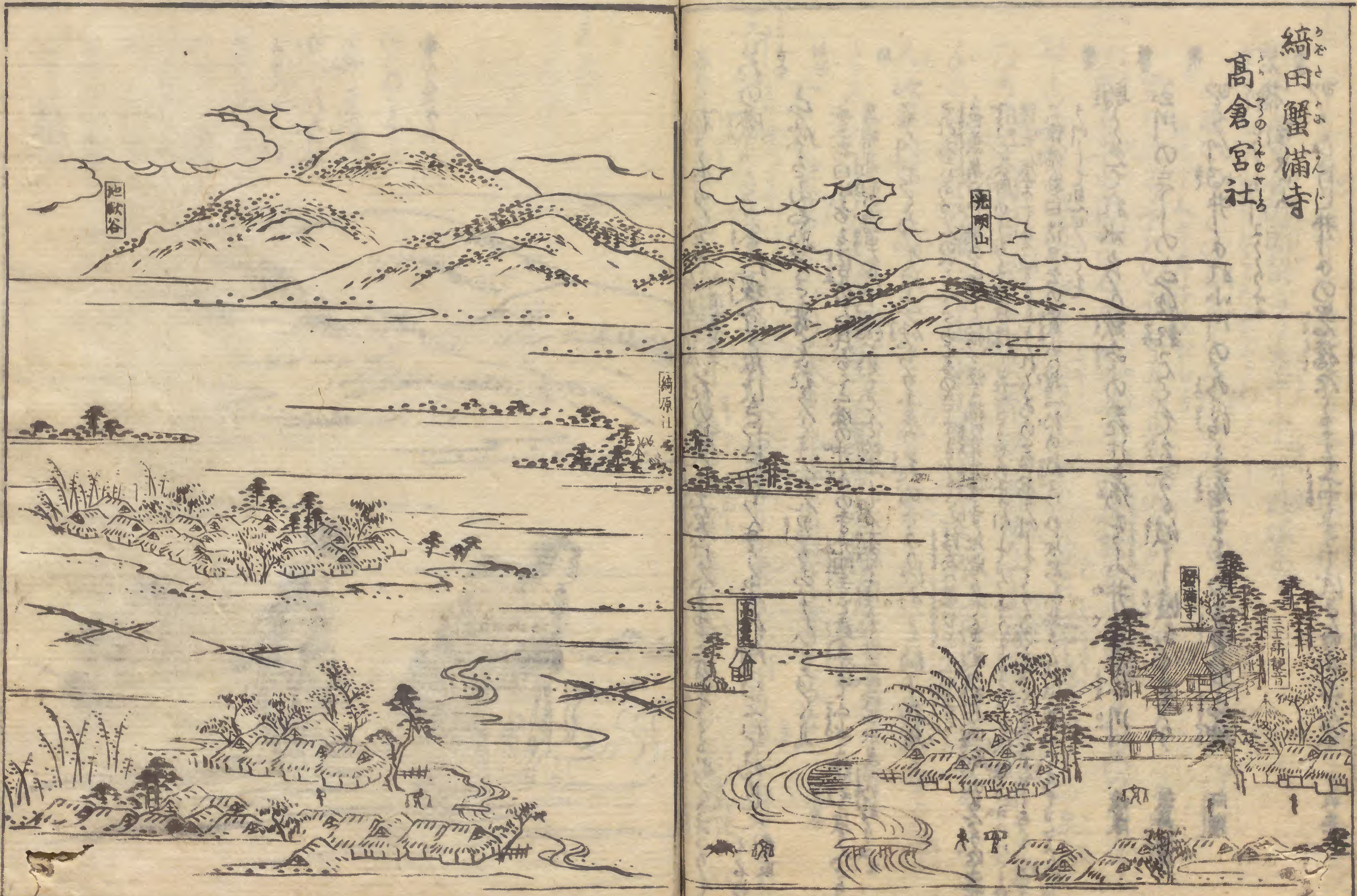
これ古今にある歌の注をして清友は橘諸兄公の男也
色葉集曰井堤の山吹は井手の左大臣橘諸兄井堤寺を造りて金堂の西面の廻廊のめぐりに植ともいへり
又維清抄曰諸兄公の宣くは
ありしてとせんとぞ

新古
駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川　俊成

新古
玉川のきしの山吹影見えて色なる波に蛙なくなり　後鳥羽院

拾
ゆく川に咲井手の小川の水清み底にうつろふ岸の山吹　師頼

家集
岩橋 橋杭は岩なり 玉川にあり
ゆきかよひし井手の岩橋かたぶきてそのかみさける山吹　秋季



綺田蟹満寺
高倉宮社

井堤の玉川ハ名所六ッ玉川の其一ッなり。左大臣諸兄公此河辺に茶蘼を初て植給ひしより八重一重咲みだれ水面に映じて金盞をつら○ころすふあんえへかたし之

拾玉集

春深き井堤の河風長閑にてちらでそなびく山吹の花

慈鎮

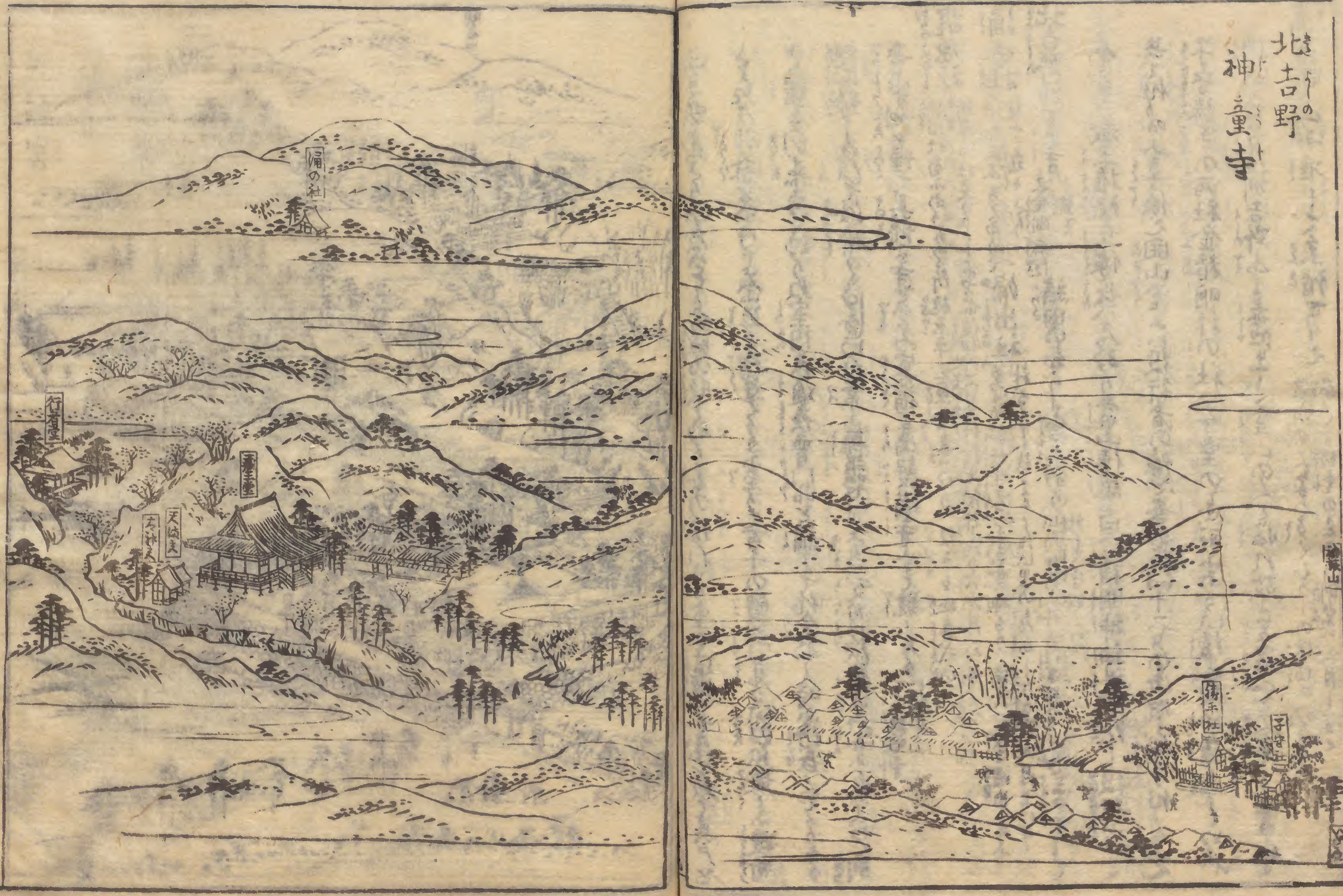
玉葉

年をへし井手の下帯めぐりあひあふせうれしき玉河の水

俊成

高倉宮霊廟　玉水の南鳥居村のかたはらにあり後白河院第二の皇子以仁親王治承四年
御殿ありしゆへ高倉宮とぞ称しける　平家物語曰宮ハ南都へ落させ給ひけるに三十騎ばかりにて
此所の光明山の鳥居の前にて追つきたてまつり雨のふるやうに射まいらせければ何れが矢とはしらねど
宮の左の御側腹に矢一すぢ立ければ御馬より落させたまひて御頸とられさせ給ひぬ
光明山寺旧跡　鳥居村の南綺田の北地獄谷綺田の中にあり
普門山蟹満寺は綺田村にあり真言宗にして本尊は釈迦仏を安置す　紫銅坐像長八尺　当寺傳
記に曰むかし此郷の人常に至善にして佛を信ずる年ありけり女さへもつねに
普門品を誦して慈悲ふかく一日田面に遊びけるが村人蟹をとりて殺さんとしけるを
買とりて放ちけり其父耕せんとて出けるに蛇の蟇を呑てありけるをお放さんとすれども放
ざりければ蛇にむかひ汝もし蟇を放ちなばわが女を嫁とすべしといひければ
蛇これを聞て呑ける蟇を吐出し藪の中へ這入ぬ父家に帰りて悔しく思ひけれども
甲斐なし其夜初更の比衣冠の人来り今朝の約束にまかりて来りしといひけれバ
いよく浅間敷おもひて何とかこたへむ三日を経て来るべしといひけれバ
帰りぬ女ひとり一つの室をこもりて閉て普門品を誦して隠れ居たりしが其衣冠の人

三日過て来りしが女なきによつて大に怒り其室を巡りて尾を以て其戸を
たゝきけり女父母は恐れて室に至りて百千の蟹群来り此蛇を散々に挟斬
く蟹ともに死す故に室内に通夜普門品を誦して仏念あり時に御長かうりよう
観音現じたまひて海中より化して常に擁護せしと宣ふ父母悦び蛇とたのみ女に
寺を穿地を埋て其地に寺を営み真福と蟹満寺と號しける　一名紙幡寺
梶原社　綺田村南にあり所梶原平三景時が霊なり一説には延喜式の
綺原の社是なるへし此所の祭神伊邪那岐大比賣神社九月三日
涌の社　林中森々たり　涌出社　祭る所和伎坐天乃夫支売神なり一説には
故に名とす此里の産神なり祭礼九月十八日
北吉野神童寺　又金剛蔵院と號す　綺田の東の山中にあり　此所伊賀上野の往還路なり　真言宗にて
本尊は蔵王権現立像長八尺あり當山傳記に曰金精明神神童に現じ役行者と
共に作りたまふ尊像也開山堂には役行者の像を安置す四十二丈の所に
子守勝手の両社金精明神の社は本堂の東二町にあり此後山は神仙の
称す此山昔和州吉野山に毒蛇出て登山の人を悩す故に笠置山を本峯として當
吉野山に准して参詣せしこと　當所の人家は多くむかしの僧坊の跡なり或は坊舎の名あり御祭は二月十一日


北吉野
神童寺
涌の社
行者堂
勝手社
子守社

薪
酬恩菴
天神森
天神宮
六坊
天神宮
八幡宮
佛殿
方丈

妙勝禅寺ハ木津川の西新村にあり　酬恩庵と号し禅宗にして開基ハ大應国師正應年中に艸創し又一休和尚康正の比に再興す　仏殿に本尊ハ釈迦仏を安置す開山堂にハ大應国師の像を安置し方丈にハ一休和尚の像を安す　此像ハ一休の時自らのみにて作らしむ鬚髪を生身に植させ

酬恩庵の額ハ方丈に掲る一休の筆なり　一休の塔ハ遺骨を蔵む又常に携へし竹杖あり

方丈の庭ハ佐川田喜六の好む所なり　八幡宮ハ当寺の西一町ばかりにあり此所の地主神也　佐川田喜六の旧居あり又傍に此人の古墳あり

神南備山　新村の西にあり峯に天神社あり　天神宮　新村の南天神社の西の端にあり延喜式に出る主人天神社なり

水晶石あり

又天神といふ此里の氏神なり　普賢寺濱　天神の社の巽にあり河州方へ出る道あり

綴喜都　普賢寺濱の巽にあり方二町ばかりにして南に山あり是むかし継體天皇の皇居を遷されし所とぞ今都谷といふ　山里原　都谷の旅を

続古　きみもなのこゝろに神さびる撫はらん山乃下道　後鳥羽院

　長月のはしめの秋まくしあまりぞうる家歌　行家

新後拾　やのそまこつゝの里にうき露をくもる白露れ　為世

段々良不動堂　都谷の山上にあり本尊ハ弘法大師の作也　大御堂　だらら村の西にあり本尊十一面観音を安置す

牛頭天王社　普賢寺谷の山上にあり此里の氏神なり祭ハ八月十八日　若王寺　寺号ハ普賢寺といふむかしハ伽藍数宇ありしとなり　若王寺社ハ下狛村にあり本尊阿弥陀仏ハ春日の作也　本堂の前にあり

藏国山　群王寺の西にあり　祝園　下狛の南にあり神武天皇の御時逆臣長髄彦亡びし所なり　土師　祝園の南にあり此里より大和の国姫へ一里半

木津川　一名泉川といふ河海抄曰泉川とハ木津川をいふ八重簀の杜の辺をいふ又瓶原の郷中井平尾村に川あり水上ハ和束より流て木津川に合す　木津川ハ伊賀より出て伊賀の水此川に流れ来て泉川といふ晴天の日にても東風つよく吹けハ満水して堤に溢る白砂常に流れて川の面をおほひ布を敷るがごとし

新古　月影もよるのよはる泉河川風涼しおちの浦　伎成女

新勅　泉河をかへすゝゆりの月影をひかれて鳴く千鳥　後京極

新續古　かもりてハ夜も雲しいづミ川さえつゝ夜ぞあはせれの君　従三位…

木津れ渡口　京師より大和街道なりいにしへ橋あり天平十三年　行基菩薩泉川に橋をかけて供養を修し給ひ聖武帝の御宇南都大仏殿建立の時国々より材木を運送して此里に着しより木津の名あり此所より奈良へ壱里半人家多く布を染る業とす

　木津里　里人いふ…

堤寄六首　いにしへの名に立ちし泉の里にかよふ川風あり

和泉式部墓　本津町の東にあり　式部此里より出ける

橋柱寺　木津の内大路村の東にあり泉川の橋断絶の後橋柱水底にありて数百年を経て後に擢り

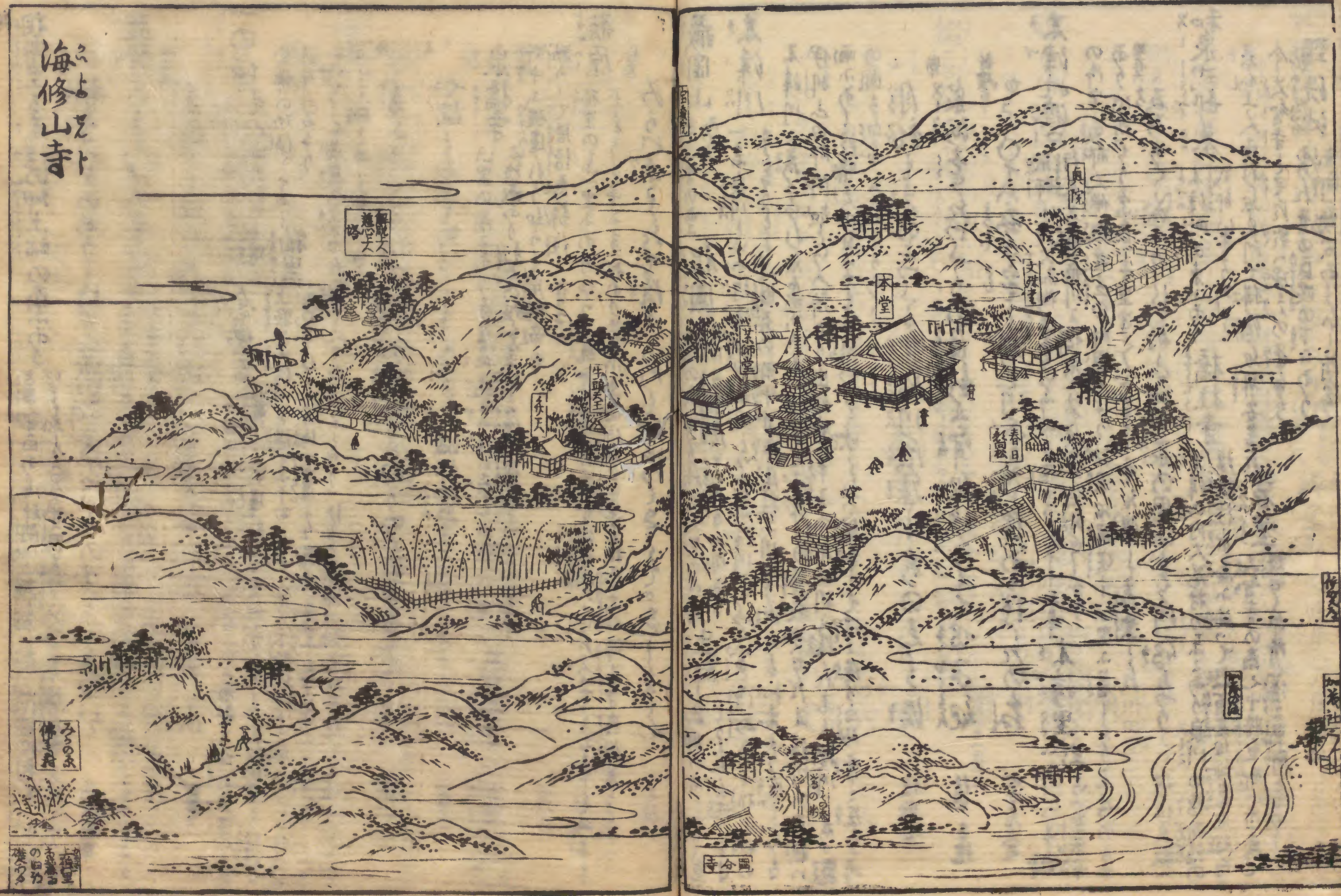
善心上人これを取りて仏像を造り安置す　今大智寺といふ

首堂　大智寺の南之中将重衡此所において誅せられ所に重衡の墓あり

頸洗池　ゆかれ堂の良堤の下にあり重衡の頸を洗し所なり

従一位良敬

海修山寺



相楽里 は木津の坤土師の南にあり 古事記曰圓野比売の命恥て山代国相楽に至り樹の枝に取懸りて死なんとす故に其地を懸木といひしを今訛て相楽といふなり

万葉
朝されかのめりしはく山城のおかのゝ白雲の増をりとれて　高橋朝臣

鹿背山 は木津の東にあり 山上に城跡あり これ故むかし木津の城といふ 鹿咋山 仙覚万葉抄に是泉川にそふてつらなりける山といへり

続後撰
爰雄が小坂のみちを行絶て雪ふる比は冬の山　公實

一の坂 木津の南半里にあり 是山城大和の堺なり 念仏石 一の坂の南にあり 上人土講座といふ 南都大仏殿再建のとき 法然上人の導師として堂供養あり しかしこの所にて説法し念仏の功徳をさとし給ふ人の石なり

狛里 上狛は木津川を隔て北十町ばかりにあり 下狛は此所より乾にあたりて木津川の西にあり むかし百済高麗より恵慈恵聡といふ二人の僧来りて此里に住せしゆゑ高麗の文字を狛と訓じ所の名とせり 一説に是百済の使と一家に住くり 偏に旁の百と狛と呼しとぞ

拾
若ふきくらは海の流の爪形りとありかゝりあるらん　朝光

泉橋寺 は里の南にあり 本尊地蔵菩薩 門外に石地蔵あり 行基の作なり 太平記に古津の石地蔵といふ是なり

やまとちもかすもうんくを山城の狛のわたりの流ならずや　兼慶

高麗寺の旧蹟 上狛の東にあり 野中に礎遺れり 行基の伝記に 用明帝の勅にて 唐僧恵弁住しまうとあり

祝園 狛里の東一里にあり 中に多ねあり 西村川 堺図侍 井手尾 東ね 登大路 仏生寺 奥畑等あり

新古今
みのれ京へもれそ涙をいろくるそのうきよとしらるらん　兼輔

かくれなくやうけれとこの里の川の渡りも今さらのえ　光俊

柞の杜 祝園の郷中西村にあり 西の山は柞山といふ　鶯の瀧 西村の入口にあり　衣の瀧 旧所也　真田川 西村茶店の前にあり

続後撰
ちりそふ山おろしの風さそふみなと紅葉をかさねて集れ　貫之

続拾
いかなれど柞の杜の時雨にも紅葉をる柞の杜の露くもるらん　後川左会

新古
時わのれ波さへ色にいづる川柞のもりにあらしふくらし　定家

国分寺 旧御河原村にあり本尊阿弥陀仏 聖武帝の勅願にて日本国毎に寺を建て国分寺と号す是その一なり

菜切石 旧御井手尾村にあり弘法大師野草を切給ふとなり

海住山寺 祝園郷仏生寺村の山上にあり 坂路八町あり 又登大路よりも登る道あり 当寺は聖武天皇の勅願所にして中興は解脱上人也 又解脱の上足慈心上人も住給ひしなり 宗旨真言にして本尊十一面観音 脇士は地蔵毘沙門也 安置せり

三重塔 招提寺の開祖鑑真和尚漢土より将来して聖武帝に献ぜし仏舎利を安置せり

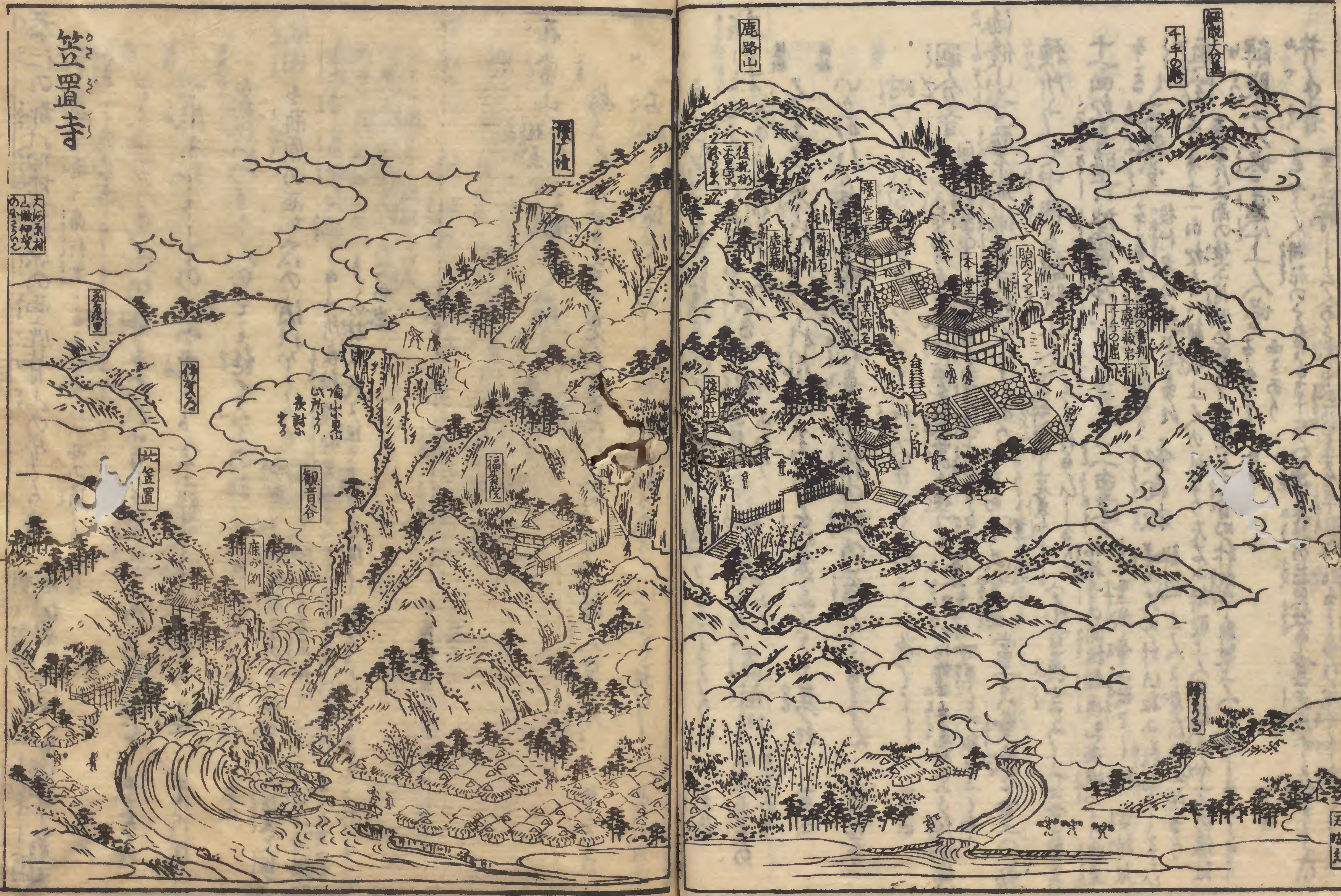
文殊堂 本尊は文殊菩薩なり 役行者の像を安置せり 影向松 是は昔大明神此松に影向し給ひし所なり

奥院 本尊十一面観音は解脱上人の作なり 左右に解脱上人の像慈心上人の像を安置す 又南の壁に月輪の窓あり此所より春日明神影向し解脱上人に謁し給ふとなり

解脱上人塔 慈心上人塔 本堂より一町西にあり

井手守 慈心上人耕作のとき井手守を千人と擇て早損の難を救ひ給ふ 其支流今に絶えずして此里に住持し十六人あり常に水筋を守りて早魃の難を防ぐ 是れを井手守と号せり

笠置寺



恭仁の都ハ旧地ハ瓶原の西鹿背山のふもとなり　聖武帝の御宇天平十二年十二月始て宮城を造り帝行幸し給ふ　賀世山の西の道より東を左京とし西を右京とせしよし続日本紀に見えたり　橘諸兄公此地を経田せし由見ゆ

新勅　みかの原久迩の都はあれにけり大宮人のうつろひぬれば　読人しらず

新拾　吹風にむかしをのこす山やおもふらん木津の都はおもふさへ　土御門院

新続古今　泉河いつより人のたえてくにの都はあれはてにけん　兼氏

流岡ハ瓶原の西加茂の渡れの北なり　聖武帝震襟を悩し給ふ所良弁僧都岩堀に祈りて千手の法を修し給へば忽山岩砕散て道を開く故に多くの材木を筏に組て安々と流し具へたりける所と流の岡といふ　泉川と流るゝ岩石河中にありて通ふ舟も危し其下に流て今飯岡といふ又一つの岩

加茂のやしろハ瓶原より鴨村に至る道の傍にあり　加茂郷を当名として中に古村あり

鴨川　やしろの東を流るゝ　清見川原　鴨の渡しに至る川原をいふ　泉川の別名なり

布当山　かせ山をいふ　瓶原の西にあり　一隅山　泉川の北なり

万葉　ふたぎ山山並見れば百代にもかはるべからぬ大宮所　読人しらず

古郷は遠くもあらず一重山こゆる我からにおもひぞわがせし　高田河内連

鹿路山笠置寺ハ木津川の河上笠置の上にあり　麓に民家多し川を隔て南を南笠置北笠置といふ

五月雨にそのしろかはなき笠置川なみはいはほもこゆるなりけり　後鳥羽

当山を笠置と号るよしハ往昔天武天皇此山に遊猟しまして馬より落んとし給ひし時驚馬巌に膝を屈して動かず天皇危急にして三宝を礼し安泰を祈らしめ給ふ時に感応ありて驚馬速に退きたり故に其証として着御の蘭笠を遺し還幸し給ふ遂に仏閣を建立ありて笠置寺と号しめ給ひぬ　麓より坂路八町あり　宗旨ハ真言にして新義也

本堂ハ弥勒仏を本尊とす　自然石に刻む　護摩堂　正月堂と号して春三面月の間天下安全の修法あり二日ハ堂

三月堂あり当山四縁の後ハ南都東大寺に移て二月三月の修法あり

弥勒石　高さ十六間横十四間ばかり面縁の石面に仏像あり　天人天降りて弥勒の像を彫む

薬師石　高サ十間余横八間ばかり　文殊石　高五丈余横四間ばかり　虚空蔵石　高サ八間ばかり石面に仏像を彫るなり

千手窟　良弁僧都千手の法を修し給ひし所なり　胎内くゞり　奥の院さしかゝり

楠書判石　楠正成石面に判を居ゑをきしなり　護摩壇跡　良弁此所において祈祷ありしとぞ　貝吹岩

蓮臺僧都の甘照の詩 榎本神 當山の鎮守之 鐘樓 解脱上人冥土より閻浮檀金を得しとなり倣ふてこれを交て鑄之しとかん銘ニ曰 笠置山般若臺建久七年丙辰八月十五日大和尚南無阿弥陀佛 般若臺 鐘樓の西にあり解脱上人と号日明神と崇角の所なり 解脱上人塔 鐘八町ばかり東にあり溪流に添て 千手瀧 石正童子瀧 金剛童子瀧 此山の谷にあり溪川のうかれなり 後醍醐帝の皇居を當山の嶺にして本丸二の丸の跡は薬師石弥勒石の上の平地なり楠正成もろともに爰にて始て御味方を申し陶山小見山ら夜討せし所は此山の背にして北の方にあたれり数百丈の巌石そびえそ鳥も翔かたく古松枝を垂蒼苔露をふくむ麓には泉川を帯て白浪巌を碎く勢ありて水流の委曲蜿蜒に似たり山州第一の勝地にして千巌秀を競ひ萬壑流を争ふ山水の美をひつくし

栗栖天神宮 笠置山の麓人家の西にあり祭る所は天満天神なり是笠置寺の守護神とんは所の氏神にして祭は九月二日也 飛鳥路 笠置の北十余町にあり陶山小見山此所より麓謡せしを今に至て笠置の東く讃ふる 有市 飛鳥路の北なり今木津川は泉川の畔にあり 大河原 有市の西にあり此所山城大和伊賀等の國堺なり

国立公文書館
National Archives of Japan